

# アジアの諸民族として ともに旅する

「別の道を通して……行った」(マタイ 2・12)



バンコク文書

2023年3月15日

# 目次

はじめに

第1部 ともに旅する：シノダリティの呼びかけに応える

第2部 アジアの新たな現実を見る：アジアの教会が直面する課題を認識して

- A. ひん繁に住まいを追われる移住移動者、難民、先住民族
- B. 社会の基盤である家庭
- C. 急速に変化するアジア社会における女性の役割の発展
- D. 教会と社会が直面するジェンダーの諸課題
- E. 新しい世界に立ち向かう若者たち
- F. デジタル技術の影響
- G. 都市化とグローバル化に直面する中での公正な経済の促進
- H. わたしたちの共通の家を危険にさらす気候危機
- I. アジア大陸に調和と平和をもたらす諸宗教対話

第3部 識別する：霊がアジアの教会に語っていること

- A. 移住者、難民、先住民族に同伴する
- B. 家庭に特別な注意を払う
- C. アジアの教会において、女性に新たにリーダーシップの役割を与える
- D. ジェンダー問題に取り組む
- E. 若者に向けた奉仕職を実践する
- F. デジタル技術の有効活用を推奨する
- G. 都市化とグローバル化の中で、包摂的成長に基づく経済を促進する
- H. 共通の家をケアする
- I. アジアにおいて橋を架ける人、架け橋となり、対話と和解の道具となる

第4部 たまものを提供する：アジアの文化と霊性

第5部 新たな道を開く：別の道を通って帰って行った

- A. 異文化による表現から、インカルチュレーションされた福音の告知へ
- B. 教会基礎共同体（BEC）から人間基礎共同体（BHC）へ
- C. 対話からシノダリティへ
- D. 告知から物語へ
- E. 踏み固められた小道から新たな司牧優先事項へ

むすび

## はじめに

1. すべての人間とその被造物に対する神の愛をあかしすることは、アジア諸民族としてともに旅するイエス・キリストの弟子の使命です。実際、ノアとの契約において、神の愛はすべての民族と被造物全体を包み込んでいます。いつくしみ深い父として、愛に満ちた母として、神は、さまざまな試練と危機を抱える現代において、わたしたちの旅路に新たな道を開いてくれます。

2. 占星術の学者たちの足跡をたどりながら、**FABC50**周年総会はわたしたちを旅へと誘い、ともに道をたどりながら、現代における神の「星」を追い、時のしるしを読み解きます。マタイ福音書による占星術の学者たちの旅の記録（マタイ 2・1-12 参照）は、**2022年10月12日**から**30日**までバンコクで開催された、**FABC50**周年を記念した最初の総会の導き手となりました。福音記者は、星に導かれた占星術の学者たちがどのように冒険の旅にともに出たかを物語ります。これは、この記念行事のテーマである「アジアの諸民族としてともに旅する……『彼らは別の道を通って……行った』（マタイ 2・12）」に着想を与えました。わたしたちは、いまこそが、アジアにおける自分たちの宣教と奉仕職を真に刷新するための新たな道を識別し、実行するためにふさわしい時であると考え、すべての人、とくに周縁にいる人々、さらに搾取の傷でうめく母なる地球にとって、福音を生き生きとした、いのちを与えるものとするのです（『ラウダート・シ』49項参照）。

3. アジアは偉大な宗教的伝統の大陸であり、平和、正義、調和を求める共通の探求を共有する、多文化の諸民族の大陸です。カトリック教会は、福音に基づき、この共通の探求を共有しています。アジアの少数派である教会は、わたしたち諸民族の喜びと苦しみを共有しています。すべての社会勢力、団体、市民社会、そして善意のすべての人々とともに、わたしたちは、現在の社会・経済・政治的生活状況から、すべての人の尊厳と権利が促進され尊重される世界へと前進するための取り組みに貢献します。人々が再び希望をもてるようになり、連帯と調和の中でともに生きることを通して、尽きることのない神の愛を体験できることを望んでいます。

4. さらに、アジアの司教として、また神の民の代表としてわたしたちは、占星術の学者たちのように、時のしるしを読み、識別し、導きを求め、新たな道を見出すためにともに集いました。わたしたちは、マテオ・リッチやその他の人々が、出身国の文化に縛られた形ではなく、真にインカルチュレーションした仕方で福音をのべ伝えていたアジア宣教のある時期のことを思い起こしました。一方で、アジアの人々の多種多様な文化に注目し、他方では、わたしたち諸民族の新たな現実、課題、希望に注目しながら、ともに旅に出、互いの話に耳を傾け、互いから学びました。ともに祈り、霊がアジアの教会と諸民族に何を語りかけているのかを識別しました。ともに礼拝し、霊が惜しみなくわたしたちに授けてくださったたまものを開封し、教会とすべての人々の善のため、謙虚な奉仕のうちにそれを提供しました。最後にわたしたちは、十全に人間らしい生き方ができる新たな道へと進んでいきました。わたしたちは、今回の総会を通して再認識され、刷新され、活性化されて、一方では地域社会、小教区、教区、司教協議会とともに、他方、すべてのアジアの諸民族とともに、シノドスの旅へと歩を進めます。神はその愛のうちに、誰一人取り残さない、社会とキリスト教共同体を築く旅へ

とわたしたちを招いています。この大陸の教会として、普遍教会との交わりのうちに、より良いアジアに、より平和で公正で調和のとれた人類に、そして自然の保護に、貢献したいと願っています。

5. 福音は、イエスの弟子であるわたしたちが、占星術の学者たちのように、あえて国境を越え、不正義な生活構造を捨て、意味と目的を求めて共通の探求の旅に出るよう促しています。そこでわたしたちは、豊かで（ヨハネ 10・10 参照）、正義にあふれ、平和に満ちたいのちを築くという神の計画に参加するのです。占星術の学者たちの旅を枠組みとして、わたしたちはこの **FABC50** 周年総会『最終文書』を次の五つの部分に分けて示します。

1. とともに旅する
2. 見る
3. 識別する
4. たまものを提供する
5. 新たな道を開く

## 第1部 とともに旅する

### シノダリティの呼びかけに応える

6. かつてイスラエルの指導者たちがそうであったように、神の呼びかけに応じるために、慣れ親しんだ土地を離れた占星術の学者たちは、居心地の良い場所を離れ、神ご自身がなされたことを行うよう招く神を求める共通の探求の中で、気づくと「シン・ホドス＝ともに歩」んでいました。千里の道も一歩から」という中国のことわざがあります。わたしたちのあがないの物語を始めた最初の一步は、神がエデンの園で、率先して人間とともに歩み始めたことでした（創世記 3・8 参照）。その「歩み」は、罪以外のすべてにおいてわたしたちと同様に、神がわたしたちのただ中に来られたことで頂点に達しました（ヘブライ 4・15 参照）。

7. マタイ福音書に、異邦人の代表として描かれている占星術の学者たちは、アジアにある教会としてのわたしたち自身の旅を思い起こさせずにはられません。さまざまな歴史的経緯がわたしたちを神の子イエス・キリストへと導いてきました。イエス・キリストは、その大いなる愛によって、「神はわれわれとともにおられる」（マタイ 1・23）という意味の、インマヌエルとして、わたしたちに神のみ顔を現しました。イエス・キリストは、わたしたちをご自分とともに旅するよう招くだけでなく、ご自身が、わたしたちをおん父の家へと導く「道」でもあるのです（ヨハネ 14・6 参照）。

8. わたしたちがシノダリティを希求する気持ちは、わたしたちとともに歩もうと先頭に立ち、「へりくだって」神とともに「歩む」（ミカ 6・8 参照）よう招いてくださる神に対する信仰のわざによってもたらされます。神は、すべての誠実な探求者、巡礼者にご自分を示し、すべての善意の人にご自分の星が見えるようにしてくださいます。

9. 奴隷であったイスラエルの人々のように、わたしたちは、ときには旅をあきらめたくなることもあります（民数記 14・4 参照）。あるいは、荒れ野で飢えと渇きに直面したイスラエルの民のように、エジプトの肉の入った鍋が恋しくなることもあります（出エジプト 16・3 参照）。行き止まりや乗り越えられないように見える壁にぶつかり、わたしたちは旅を続ける気持ちがなえてしまいます。

10. 占星術の学者たちは天を仰ぎ、導きを求めながら、自分たちのために道を切り開きました。神のことばを祈り、観想する空気から、シノダスの旅の途上のわたしたちは、歩み続ける力を受けとります。まるで、「驚きの星、夜の星……が完全な光へと導いてくださる」ように、わたしたちは天を見上げ続けるよう招かれているのです。そうしなければ、ともに旅をしても、わたしたちは道を見失うかもしれません。

11. キリストの道が「十字架の道」としてのみ描かれ、苦しみと死を賛美する、病的な旅のように思われることがあまりにも多いのです。弟子たちと同様、わたしたちも空の墓の意味を見逃し、悲しみや混乱によって復活のキリストに出会い損なってしまうことがあります。エマオへ向かう 2 人の弟子のように、ともに旅をしているにもかかわらず、気づくと間違った方向に行っていることもありえるのです（ルカ 24・13-35 参照）。

12. イエスをのべ伝えるという真の目標を見失った、まさにそのとき、わたしたちはあきらめる誘惑に駆られます。イエスの弟子たちの中には、ご自身の体と血をわたしたちに与えるというイエスの約束は「困難なおきて」だと感じた人もいて、彼らはイエスから離れました。イエスが 12 人にした問いは、わたしたちにも向けられうるものです。「あなたがたも離れていきたいか」（ヨハネ 6・67）。

13. 教会の歴史には、教義の問題、司牧的問題、運営上の問題などのために、ともに旅をするのではなく別々の道を歩むことになった悲しい分裂のエピソードが数多くあります。そのたびに、ペトロのことばを思い出します。「わたしたちはだれのところへ行きましょうか。あなたは永遠のいのちのことばをもっておられます」（ヨハネ 6・68）。

14. アジアの教会も、正しい道から外れてきたこともありました。中国におけるマテオ・リッチや、インドのロバート・デ・ノビリのように、新しい道を切り開いた先駆者もいましたが、たいていの場合、教会は過去の抛り所を断ち切ることを望まず、これまで通りの道を歩んできました。フィリピンにおける 1986 年のエドサ革命（ピープルパワー革命）や、最近のミャンマーやその他の場所における預言者的人物たちのように、教会が支援した、自由を求める大規模な運動が起こってきました。しかし、教会の預言者的な声は静まってしまふこともありました。さらに、人権のために立ち上がることに慎重になりすぎることもありました。

15. バンコクで開催された **FABC50** 周年総会を通してわたしたちは、占星術の学者たちのように新たな道を見出そうと努めてきました。パウロが異邦人にかかわるようになったことに反発し、宣教をユダヤ人改宗者だけに制限しようとする人たちが現れたときに、ペトロが第 1 回エルサレム使徒会議（使徒言行録 15 章）でしたことを、わたしたちも実行するよう導かれました。エルサレム使徒会議において、ペトロは指導者としての役割を担い、ヤコブとパウロの間に立ち、二人がともに歩めるよう取り計らいました（同、参照）。

16. 教会に提案された新たな道程は、シノダリティの道です。シノドス的な教会には、交わり、参加、宣教という、不可欠な 3 要素があります<sup>1</sup>。

17. 「交わり」は、排他性の傾きに対するアンチテーゼです。洗礼を受けた人は皆、尊厳において平等です。果たす役割は違っても、洗礼を受けた人として、わたしたちは皆、「選ばれた民、王の系統を引く祭司、聖なる国民、神のものとなった民」（一ペトロ 2・9）なのです。教会には、一流の人も二流の人もありません。霊はさらに、わたしたちが同じカトリック信者とだけでなく、すべてのキリスト者、人類すべて、造られたものすべてとの交わりを結ぶよう、力を与えてくれます。洗礼のときに受けた交わりの霊の力によらなければ、わたしたちは交わりの担い手にはなれません。霊との交わりのうちにおいてのみ、わたしたちは弟子の共同体へと成長し、パン生地のかたまりの中のパン種のように働く、キリスト教基礎共同体、人間基礎共同体の建設者となることのできるのです。

---

<sup>1</sup> 「ともに歩む教会のため——交わり、参加、そして宣教」、シノダリティに関する世界代表司教会議の『手引書』。

18. 「参加」は、キリストのからだが生きており、その各部分は同じ霊によって生かされていることを示すもっとも明白なしるしです。教会への参加を妨げるものは「権力」という課題です<sup>2</sup>。聖職者の役割が権力の地位に転換されると、キリストのからだの他の部分が、それぞれのカリスマに従って適切な役割を果たすことを妨げる傾向があります。このように教会は「聖職者至上主義」の教会に成り下がってしまいます。教会を建設するために、さまざまな奉仕職を奨励し、それらを調整することを主な役割とする、叙階された奉仕者が指導力を独占してしまうときには、ヤコブとヨハネに対するイエスの次の戒めを思い起こす必要があります。「あなたがたの間では、そうであってはならない」（マタイ 20・26）。リーダーシップはつねに奉仕する精神で実践されなければなりません。「仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分のいのちを献げるために」（マルコ 10・45）来られたイエスのリーダーシップに参加するのです。

19. そして最後に、「宣教」は、教皇フランシスコが「自己中心の姿勢（self-referentiality）」と呼ぶものへと向かうわたしたちの傾向の対極にあるものです。自己中心的になるのは、わたしたちは自分自身のために存在するのではなく、むしろ世界のために存在するのだということを忘れてしまうときです。このことは、人々が奉仕する教会の一部として社会に奉仕するのではなく、教会にのみ奉仕するように仕向けることを主な目的として、わたしたちの奉仕職が制定されるときに起こります。

20. その途中で、わたしたちは多くの「ヘロデたち」から挑戦を受けています。したがって、自己満足に浸ることはできず、「現状維持モード」にとどまり、慣れ親しんだ道だけに固執する、起こりがちな傾向を避ける必要があります。

21. 会議の最終日、教皇特使を務めたルイス・アントニオ・タグレ枢機卿は、わたしたちに重要な課題を投げかけました。タグレ枢機卿は、FABCのビジョンである、（諸宗教、諸文化、貧しい人々との）三者の対話を通して福音化に携わる教会、を認識し、対話がしばしば二者間、つまり二者間の力学としてのみ理解されていることを指摘しました。彼は、多角的な対話を探求するという課題を提起しました。つまり、わたしたちが「多対多の会話（multilogue）」と呼ぶような会話、あるいはこのFABC50周年総会自体に、もっとも新鮮な性格を与えているシノダリティの精神をまさに必要とするような種類のものです。わたしたちの地方教会において、わたしたち自身の間で「内向きに（*ad intra*）」、また、わたしたちが活動しているアジアのさまざまな社会との関係の中で「外向きに（*ad extra*）」、対話から生まれる霊性、生活様式、暮らしをより真剣に考える必要があると語りました。

22. シノダリティは、司教や叙階された教会指導者の間にだけ存在するべきではありません。もしシノダリティが、教会における交わり、参加、宣教を促進することに関係するものであれば、わたしたちアジアの教会は、シノドスの意見聴取を通し、また、司教だけでなく、他の信者（信徒、修道者、聖職者）、さらに教会の生活と宣教に影響を与える他の社会領域も参加するような共同識別の機会を通して、「信者総体の信仰の感覚（*sensus fidelium*）」を確かに識別できるようにしなければなりません。

---

<sup>2</sup> 1990年にバンドンで開かれた総会で、わたしたちは、真に参加型の教会の、もっとも具体的な表現となるBEC（教会基礎共同体）の成長を促進することによって、教会の新しいあり方を追求することを決議した。

ん。アジアの教会は、シノドス文書のタイトルとして使用されている、イザヤ書 54 章 2 節の「あなたの天幕に場所を広く取りなさい」ということばを、つねに思い起こすべきです。

## 第2部 アジアの新たな現実を見る

### アジアの教会が直面する課題を認識して

23. 「イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。そのとき、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て、言った。『ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです』」（マタイ 2・1-2）。マタイは、イエスを捜している異邦人たちを、「占星術の学者たち」、つまり、努力して時間をかけて空を「見上げ」、星を眺める知恵ある人々だと説明しています。このことは、彼らが地上の関心事について思い巡らし、天の導きを求めていたことを示しています。

24. アジアの教会は、占星術の学者たちが踏み出した探求の旅にとっても共感できます。福音記者は、彼らをアジアの観想的な性格に似た姿で描写しています。わたしたちは、彼らが沈黙のうちにとともに旅をし、必要なときにはいつでも質問をし、神と人間の両方の導きを求める姿を思い浮かべることができます。

25. 占星術の専門家たちのように、**FABC50** 周年総会に集まったわたしたち司教団は、大陸の新たな現実をよりよく理解するためにわたしたちを導いてくれる、社会学者、環境専門家、経済学者、政治学者、神学者、心理学者、法律家、活動家などの専門家に、人の手による導きを求めました。そして何よりも、神の導きを求めました。アジアの多面的で多様な現実を見つめるたびに、わたしたちは必ず沈黙のうち祈りました。毎朝のセッションは、インカルチュレーションされた朝の祈りと、社会状況を反映した聖書箇所の内省から始まりました。祈りの雰囲気が持続することで、信仰と霊性の観点から新たな現実を見ることができました。

26. 占星術の学者たちが「賢明」であったのは、天を仰いだからだけではなく、周囲を見回して意見を求めたからでもあります。わたしたち自身も、この **FABC50** 周年総会の中で、祈り、聖書を内省し、霊的対話をする中で、アジアの現状を見るための適切なレンズ、つまり、人間の目と同時に神の目、受肉した神の目が与えられることを願いながら、何度も目を高く上げ、周りを見回しました。

27. わたしたちも同様に、とくにアジア各国への「バーチャル訪問」の際、各地方教会の歴史的ルーツ<sup>3</sup>と発展について何度も振り返りました。その中には、韓国、日本、ベトナム、カンボジアなど、文字どおり殉教者の血によってはぐくまれた国もあります。それぞれの「訪問」によって、アジアのさまざまな国々におけるキリスト教信仰の始まりや、福音の最初の種をまくための土壌を準備した初期の宣教師たちのことを理解し、感謝できるようになりました<sup>4</sup>。それぞれの「訪問」によって、各地方

<sup>3</sup> シロ・マラバル、およびシロ・マランカラ典礼の兄弟司教たちは、「シリア東方教会」と呼ばれるキリスト教伝統が、第1千年期初頭とそれ以降にアジア大陸に広まり、その大部分が使徒聖トマスの宣教に起因していたこと、そして迫害やその他の要因のために第1千年期末までに、いかに衰退し、第2千年期の宣教によってようやく復活したことを、わたしたちに知らせてくれた。このテーマに関する歴史研究の成果を熱望している。

<sup>4</sup> 聖フランシスコ・ザビエル、マテオ・リッチ、ロベルト・デ・ノビリ、ジョン・デ・ブリトーなどの宣教師たちは、出かけていって宣教することに燃えていた。聖ジョゼフ・ヴァスももう一人の模範

教会に現れ、影響を与えつつある、希望に満ちた現実や、痛みを伴う現実の両方に、わたしたちの目が開かれました。さらにまた、アジア各国のさまざまな小教区やセクターから、普段はあまり聞くことのできない声を聞く機会にも恵まれました。

28. わたしたちは、かつてキリスト教信仰に敵対的であったアジアの多くの国々で、教会が控えめな形で繁栄していることを指摘しました。国家建設、人々の発展、教育、環境への配慮、反人身取引運動<sup>5</sup>、社会的コミュニケーションなどに対する、各地方教会の積極的な貢献を歓迎する各国政府の報告を聞いています。韓国の兄弟司教たちは、「他宗教」ではなく「隣人宗教」という語彙を用い、わたしたちを啓発しました。インドネシアの司教たちは、ジャカルタの、イスティクラル・モスクと被昇天の聖母司教座聖堂を地下で結ぶ、「友好のトンネル」という諸宗教融和の永続的なシンボルでわたしたちを触発しました。生まれたばかりのモンゴルの教会は、主に NGO（非政府組織）として機能していますが、モンゴル政府と良好なパートナーシップを結んできています。アジアのいくつかの国では、教会は政府機関や市民社会と連携しながら、新型コロナウイルス感染症のパンデミックに対処するための積極的なアプローチを行ってきました。

29. 一方で、信教の自由の侵食、宗教過激主義、良心と信教の自由を脅かす法律、宗教過激主義を動機とするテロ攻撃、偽情報のためにソーシャル・メディアを利用する大衆迎合主義で、権威主義の政府の台頭などに対処している、アジアのいくつかの地方教会の中の困難な状況について耳にしました。組織的な腐敗と人権侵害という前科があるにもかかわらず、彼らは国民が自分たちに投票するようにうまくやっているのです。逆説的になりますが、そこでは権威主義的な支配に新たな魅力を感じ、市民的自由を軽視することに寛容になっているように見えます。

30. アジアの広さと深さゆえに、この広大な大陸に影響を与える問題の多様性を理解するのは実に難しいことです。そこでわたしたちは、アジア社会でもっとも影響のある現実

に焦点を当てました。その中から、わたしたちは九つの主要な優先課題を特定しました。

- A. ひん繁に住まいを追われる移住移動者、難民、先住民族
- B. 社会の基盤である家庭
- C. 急速に変化するアジア社会における女性の役割の発展
- D. 教会と社会が直面するジェンダーの諸課題
- E. 新しい世界に立ち向かう若者たち
- F. デジタル技術の影響
- G. 都市化とグローバル化に直面する中での公正な経済の促進
- H. わたしたちの共通の家を危険にさらす気候危機
- I. アジア大陸に調和と平和をもたらす諸宗教対話

---

で、彼はイエスの福音を伝えるためにゴアからスリランカへと向かった。拒絶され、追放されても落胆せず、それでもスリランカに行き、港でポーターとして働きながら、「よい知らせ」を伝える宣教を続けた。

<sup>5</sup> 「タリタ・クム」活動が念頭にある。

## A. ひん繁に住まいを追われる移住移動者、難民、先住民族

31. ベツレヘムから逃れてエジプトに避難しなければならなかった聖家族のように、アジアの貧しい人々の多くは、国内、また海外への移住者として家を追われています。2050年までに世界中で4億人以上の移住者が発生するだろうと指摘されていました。わたしたちは、人々が家族のためにより良い生活を求めて移住する権利を認める一方で、その結果生じる頭脳流出の悪影響についても意識しています。看護師、医師、介護士、建築家、エンジニアといった専門職が、こうして他国へ移住し続けることによって、彼らの母国における低開発の状況は悪化する一方です。

32. アジアは急成長する移住産業の舞台となっており、合法・非合法を問わず、人間の価値観に多大な犠牲を払わせながら、それは行われています。家族生活は崩壊し、子どもたちは見捨てられ、社会基盤は徐々に蝕まれていきます。移住者の送金はその経済に大きく貢献している国もあり、このことは、一部の開発途上国政府が、自国の発展を損なうほど、労働者が他国へ渡るよう促す政策をとっていることを物語っています。移住者が苦労して稼いだ金を本国に送金し、自国の経済を助ける一方で、本国政府が移住労働者自体のために資金を投資することはほとんどなく、中には、外国で働けるようになるため、自分の土地を売らなければならなかった人さえいます。

33. 多くの人々が経験する虐待や搾取の恐ろしい話は、21世紀になって、奴隷制度が存在し続けていることを証明しているにすぎません。わたしたちはとりわけ、湾岸諸国や他のアジア先進国で、契約労働者として暮らすインド人、フィリピン人、パキスタン人、バングラデシュ人、スリランカ人のことを考えています。多くの場合、彼らは受け入れ先の都市や国の経済に貢献しているにもかかわらず、好ましからざるよそ者のように扱われます。彼らの多くは家族と離れ離れになり、孤独に耐えています。ホームシックに対処しようと奮闘するうちに、婚外恋愛に巻き込まれ、複雑な家庭状況に陥る人たちもいるのです。

34. ミャンマーやその他の地域で、武力紛争によって避難民となった多くの人々や、政治的迫害を避けるために亡命を求める政治難民のことを考えています。そうした中には、不法滞在者として他国に入国し、強制送還されることを恐れて入国管理局から身を隠している人もいます。不法入国者で、法的地位もないため、その中の多くは社会的便益を受けることなく、安価な労働力として搾取され、教育や医療などの公共サービスを利用することもできません。

35. 多くの移住者が未熟練労働に従事し、彼らの大半は、正社員契約がなく、不当な賃金しか受け取れず、人間以下の労働条件に耐えています。組合を組織したり加入したりする自由といった、移住労働者の福祉のための規定や法律の欠如は、政府が対処すべき多くの課題のうちの一つです。女性の移住者は通常、最悪の形態のハラスメントや虐待を受け、もっとも保護から外れ、最低の賃金に苦しめられます。移住労働者の権利を守り、彼らの不満に耳を傾け、そうした状況を訴えている国際組織、全国団体の存在は心強いものです。

## B. 社会の基盤である家庭

36. 家庭は社会の不可欠な一部です。それは価値観や徳が最初に教えられる場であり、愛と犠牲が最初に体験される場であり、忠実さとゆるしが最初に学ばれる場です。ほとんどのアジア人は、仲の良い家庭生活を祝福とみなしています。聖ヨハネ・パウロ二世教皇はこう断言しました。「通常、若者が人間的にも社会的にも成熟する場」、「人間性そのものの遺産を伝える所」として、「家庭は、アジア文化において非常に重要な位置を占めています……」（『アジアの教会』46項）。

37. しかし、アジアの家庭は現在、その平穩、安定、一致を脅かす多くの課題に直面しています。悲劇的事件、暴力、戦争、自然災害による死によって、親を失い、両親とも失った子どももいます。都市や海外への移住労働者によって、家庭離散が余儀なくされます。幸いなことに、近親者（祖父母、叔父、叔母、兄姉、いとこなど）の支えによって、残された子どもたちは困難に立ち向かい、伝統的な価値観を吸収できます。アジアの人々は、子どもは両親がそろって育つのが一番幸せだと信じてるものの、働く母親、専業主夫、片親たちの支援もしています。可能な限り、両親やその代理者が子どもの教育を行います。教会設立の学校、単科大学、総合大学は、私学制度に大きく貢献しています。

38. 混宗婚や異宗婚は、確かになんらかの問題を引き起こすものの、それらは、エキュメニズムや諸宗教対話の最初の学校と理解されます。その家庭の福祉と将来を案じ、老いも若きも社会に参加し、わたしたちの共通の家である地球へのケアを促進するのです。

39. ソーシャルメディアの利用がますます可能になってきた地域では、家庭に対する考え方が、文化のグローバル化によって悪影響を受けつつあります（『アジアの教会』39項参照）。さらに、政府の人口抑制政策も、結婚、出産、子育てに対する考え方に大きな影響を与えています。

### C. 急速に変化するアジア社会における女性の役割の発展

40. FABC50 周年総会の『案内文書』にはこう記されています。「わたしたちは、アジア全域の多くの生活領域で、女性に対する差別、暴力、抑圧の話をいまだに耳にします。女性の指導力は過小評価され、その貢献は無視され、いまだに女性を下級の人間として扱う社会もあります。賃金格差、所有や相続に関する法律、女兒の教育機会、女子胎児の人工妊娠中絶、医療へのより限られたアクセス、意思決定、その他多くの分野で、女性に対する偏見が数多く報告されています。憂慮すべきことに、ジェンダーに基づく暴力は存在し続け、ジェンダーの問題はほとんど認識されていません」<sup>6</sup>。

41. アジアの女性は、教会の中にある一部の家父長制的な考え方や、アジアの一部の宗教や南アジア特有の文化における純潔やタブーの概念のために、教会や社会の中で疎外されることがよくあります。教皇ヨハネ・パウロ二世使徒的書簡『女性の尊厳と使命』や教皇フランシスコのシノドス後の使徒的勧告『キリストは生きている』など、多くの教会の教えは女性の尊厳を強調していますが<sup>7</sup>、理論と現実の間には、依然として大きな隔たりがあります。一つの小教区を活気づけるという点では、女性は数の上で間違いなく多数派ですが、教会の意思決定にはそれに比例して関与してはいません。女

<sup>6</sup> FABC50 周年総会『案内文書』。

<sup>7</sup> とくに『女性の尊厳と使命』29項、『キリストは生きている』42項参照。

性が家父長的な価値観や態度を内面化していることも、教会における女性の尊厳と使命を阻害する重要な要因です。彼女たちの苦しみは、性差別、階級差別、人種差別と結びついています。

42. しかしながら、状況は変わりつつあります。最近のピュー・リサーチ・センターの調査<sup>8</sup>によると、生活のさまざまな領域において、ジェンダー平等の観点でいくつかの改善が見られると指摘されています。たとえば、アジアの女性たちは、自分たちの声が聞き届けられ、自らの本質的価値が認められるようになることに関して、長い道のりを歩んできました。彼女たちは、伝統的に男性に与えられてきた責任を担うようになり、家父長制社会の課題を突破し続けています。教皇フランシスコはこう注意を促します。「女性の正当な権利の要求は、男女は等しく尊厳を有しているという確たる信念によるものですが、うわべだけで回避することはできない深く挑戦的な問いを教会に提起しています」（『福音の喜び』104項）。女性たちは、階級構造が自分たちを抑圧することのない、オルタナティブな社会を夢見ています。

#### D. 教会と社会が直面するジェンダーの諸課題

43. LGBTQI+の人々はきわめて疎外されており、その明確な性的指向、性自認や表現に基づいて、さまざまな形のスティグマや差別に直面しています<sup>9</sup>。たとえば、ジョージア、シンガポール、タイは同性愛関係に対してある種の寛容さを示していますが、他方、アフガニスタン、ブルネイ、イラン、カタール、サウジアラビア、アラブ首長国連邦、イエメンは、同性愛行為は死刑に値すると認識されています<sup>10</sup>。同様に、2021年にタリバンが政権を奪取したのち、LGBTQI+の人々が平穏に生活することはますます困難になっています<sup>11</sup>。

44. 『エコノミスト』誌は、2019年に実施した調査で、アジア太平洋地域の回答者の45%が同性婚は同地域において避けられないと考える一方、回答者の31%は断固として受け入れられないと考える、と公表しました<sup>12</sup>。ジェンダーの課題は実に議論の分かれる問題であるため、非常に高い感受性と識別力、そして慎重さをもって対処する必要があります。

#### E. 新しい世界に立ち向かう若者たち

45. 国連が定義する、15歳から24歳までの若者は、現在の世界人口の約18%を占めています。現在世界にいる12億人の若者の大部分は開発途上国に住んでいます。2005年には、世界の若者人口の61.8%がアジア太平洋地域に住んでいました。さまざまな人口動態の要因によって、アジア太平洋地域では近年、「若者突出」が見られ、15歳から24歳が全人口の20%以上を占めています。

<sup>8</sup> <https://www.pewresearch.org/global/2019/04/22/how-people-around-the-world-view-gender-equality-in-their-countries>.

<sup>9</sup> アジア太平洋において、LGBTQとして存在することについては、次のサイト参照。

<https://www.undp.org/asia-pacific/projects/being-lgbti-asia-and-pacific>.

<sup>10</sup> <https://www.washingtonpost.com/news/worldviews/wp/2016/06/13/here-are-the-10-countries-where-homosexuality-may-punished-by-death-2/>。2023年2月17日アクセス時点。

<sup>11</sup> <https://www.hrw.org/report/2022/01/26/even-if-you-go-skies-well-find-you/lgbt-people-afghanistan-after-taliban-takeover>。2023年2月17日アクセス時点。

<sup>12</sup> <https://lgbtq-economics.org/research/lgbt-adults-2019/>。2023年2月17日アクセス時点。

46. いくつかの要因が重なり、今日のアジア太平洋地域の若者は、かつてないほど社会、経済、政治的發展に関与し、そこから恩恵を受ける態勢が整ってきています。それ以前の世代に比べ、この地域で初等教育を修了した若者の割合は高くなっています。教育水準が向上し、高等教育レベルの総就学率は男女の若者でそれぞれ18%、15%に達しています。アジア地域全域において若者は、自らの未来を切り開くことのできない受動的な傍観者としてではなく、重要で対等な参加者として、地方、国、そしてアジア地域の発展に参加するイニシアティブをとっています。「アジアの若者は、多くの国々で社会的、宗教的変革の先頭に立つことが多く、さまざまな社会解放運動や権利擁護運動を率い、教会の刷新運動に参加し、教会の司牧計画や教会基礎共同体のリーダーとして頭角を現しています」

(FABC 第8回総会『最終文書』33項)。彼らは、「新宗教運動が明らかに示しているように、……霊的な価値を真剣に求めています」(『アジアにおける教会』6項)。若者たちの中には、「神への探求心……兄弟愛への……あこがれ……世界に何らかの貢献をなすため、自分の才能を伸ばしたいという確かな願い……特別な芸術的感性が、また、自然界との調和への希求……コミュニケーションに対する強い意欲……違った生き方への強い望み」が「見て取れます」。それらは「真の出発点であり、刺激、光、励ましとなることばに開かれて待つ、内なる力なのです」(『キリストは生きている』84項)。

47. 現在の若者たちは、多くの優位性や資源を有していますが、新たなチャンスが大きな課題がとともに共存する、複雑で、急展開する状況にも直面しています。熾烈な競争がアジア地域の市場に影響を与えています。若者はしばしば弱い立場に置かれ、変化する経済・社会環境に適応するために必要な知識や技能を欠いています。たとえばアジアでは、2004年の労働力人口に占める若者の割合は20.8%でしたが、失業している若者はアジア地域の失業者のほぼ半分(49.1%)を占めていました。長期にわたる失業は、非行や薬物乱用など、さまざまな社会的病巣を引き起こします。それらは、若者が陥りやすいものであり、しばしば政情不安や暴力を助長します。薬物乱用やその他の健康上のリスクは、非就学者の間でとくに高くなっています。

48. この、絶え間なく変化する状況の中で、青年司牧は単に過去に行ってきたことの改善に限定されることなく、新しいアプローチ、改良された視点、進化した組織を模索することで、司牧者たちは、若者を信頼し、評価する真摯な姿勢と心構えを示すことができます。さらに若者は、教会の未来と呼ばれるよりは、現在の教会の生活と使命の中に自らを見出すほうを好みます。「あなたたちの人生は、『そうこうするうちに』といったものではありません。あなたたちは、あなたたちに多く実ってほしいと期待をかけておられるかた、神の、今なのです」(『キリストは生きている』178項)と語る教皇フランシスコに、自分は認められていると感じるのも何ら不思議ではありません。

## F. デジタル技術の影響

49. 現千年期の幕開け以来、デジタル技術によるコミュニケーションや相互交流の世界は、急速な上昇カーブを描いて発展し、生活の一部となっています。デジタル化は生活のほとんどすべての領域に影響を及ぼし、数多くの仕方で効率性と生産性を向上させてきました。

50. しかし、利点とともに課題もあります。たとえば、デジタル化によって、個人の安全、離人症、ヘイトクライム、フェイクニュース、社会的断絶、いじめ、依存症などの課題が生じています。さらに、こうした新しいデジタル・プラットフォーム、とくにソーシャルメディアにおいては、テクノロジーを所有する人がルールを決めていきます。その所有者は、データを保持し、消費者に対して権力をもつことで金を稼ぎます。また、広告を利用することで、彼らが流布しようとする「物語」をコントロールすることもできます。わたしたちはまた、デジタル化が、政府や企業によって権力を行使し、文化に影響を与えるために利用されていることも理解しています。本当に心が痛むのは、インターネットを利用したサービス（教育、金融、行政、宗教の）を利用できる人とそうでない人の間に、デジタルデバイド（訳注：ネット利用の可否による情報格差）が生まれていることです。人工知能の分野での急速な進歩も、人類に新たな課題を突きつけています。これらすべては、わたしたちがより新しいデジタル世界、バーチャル世界に移行する際、注意を促すものです。

51. わたしたちはとくに、デジタル技術が若者の全人的成長に悪影響を及ぼすことに注目しました。最近の若者は、ソーシャルメディアを通じて自分自身を見つめ、アイデンティティを確立したり、安心感を得たりする傾向があります。最近の研究を引用しながら、デジタルメディアが若者に与える深刻な影響の一つであり、警戒すべき一つの原因は「若者の共感力の未発達」である、ということが指摘されました。同様に憂慮すべきは、デジタルメディアによって、若者たちの、「真剣に読書する」能力が著しく低下しているという現実です。読書は、若者の心に論理的、推理的、情緒的、分析的、観想的能力を発達させるために不可欠です。

52. カトリックのメディア関係者は、教会指導者たちに対し、自分たちも影響力をもち、告げ知らせるべき説得力のあるメッセージをもっていると認識するよう呼びかけました。教会が所有する、安全なソーシャルメディアのプラットフォームの立ち上げや、各地方教会に、ソーシャル・コミュニケーションのためのチームを構築することなどが、彼らの、効果的なデジタル手法による福音化のための提案には含まれています。デジタル世界においては、「物語」こそが戦略となることを、教会指導者たちに思い出させつつ、物語、イメージ、比喩などの力を活用する、創造的な要理教育についての提案を行い、より効果的に、神のことばを人々の生活に結びつけました。最終的には、いわゆる「デジタルネイティブ」と呼ばれる若者たちが、こうした奉仕職を先導していくことが期待されます。

## G. 都市化とグローバル化に直面する中での公正な経済の促進

53. 今日、全世界は一つの大きな「地球村」となり、そのプロセスはグローバル化と呼ばれ、それは文化の均質化をもたらしています。こうした現象は、アジアの人々の多文化的な生き方を著しく阻害しており、「文化のグローバル化」と呼ばれています。しかし、「経済のグローバル化」も存在し、世界各国の経済は結びついています。「1998年『世界平和の日』メッセージ」の、教皇ヨハネ・パウロ二世のことばを思い起こします。「1989年以降に起こっている大規模な地政学的変化は、社会と経済の分野に文字どおりの革命をもたらしました。経済と金融のグローバル化は今や現実のものとなり、情報技術の急速な進歩がもたらす効果をますます実感するようになってきています。わたしたちは、大きな希望と同時に不安にさせる疑問を併せもつ新しい時代の幕開けを目前にしています」。

54. 一方では、グローバル化は世界を一つにし、世界のどの地域でも地震や自然災害に見舞われた国の救援に駆けつけることができるようになりました。他方でそれは、世界を分断し、貧富の差は拡大しました。万人を受け入れる包摂的な世界になるどころか、開発の名のもと、何百万人もの人が排除されています。「貨幣・利益・市場」が今日の経済の推進力となっているようです。さらなる富を渴望するグローバル化勢力は貧しい人々の資源を横取りし、彼らの労働力を不当に搾取しています。これらはすべて、開発、進歩、成長の名のもとに引き起こされています。

55. 経済学者でもあった、インドのマンモハン・シン元首相が、インドについて述べたことは、アジア全体に当てはめることができるでしょう。つまり、わたしたちは「成長をもたらす方法は学んだものの、包摂性については、まだそれに匹敵する成功を収めてはいません」<sup>13</sup>。

56. したがって、これこそがアジアの教会の眼前にある課題、つまり、一部の人たち、いわゆる「クリーム層」だけでなく、すべての人たちのために経済をどう導くか、ということです。2001年4月27日、聖ヨハネ・パウロ二世教皇が教皇庁社会科学アカデミーの演説で述べたことばを、アジアの教会は自らのものとしてすることができるでしょう。「この歩みの勝者が、科学、技術、コミュニケーション、地球資源を支配し、大多数の人に損害を与える裕福なエリートだけでなく、人類全体となるよう保証するために、教会はすべての善意の人とともに働き続けます。社会のすべての人が協力し合い、全人類に奉仕するグローバル化を推進することを、教会は切に望んでいます」<sup>14</sup>。

## H. わたしたちの共通の家を危険にさらす気候危機

57. もし占星術の学者たちが21世紀に生きていたら、おそらくベツレヘムで生まれたばかりのイエスを礼拝するのに間に合わなかったでしょう。彼らはヘロデだけでなく、異常気象、洪水、台風、森林火災、海面上昇、食糧不足、ウイルスの突然変異、新たな疾患にも対処しなければならないでしょう。これらすべてが、生まれたばかりの王を彼らが探し求めることの障害となったことでしょう。

58. 実際、21世紀に人類が直面する長期的課題は、人間が引き起こした気候変動とそれに伴う生態系の危機であると、わたしたちは認識しています。アジアではすでに、異常気象、干ばつ、台風、森林伐採や森林火災、水利用をめぐる紛争などにより、数え切れないほどの人々が苦しんでいます。水が利用可能であることは食糧供給に直接的な影響を及ぼします。アジアには気候変動に脆弱な国々が多く存在しており、海面上昇、大気汚染、土壌汚染、水質汚染、「使い捨て精神」、生物多様性の喪失、廃棄物管理などにより、すでに数百万もの人々が苦しんでいます。これらはすべて、自然と、将来の世代に対する犯罪です。

59. 聖パウロは、「被造物全体が今に至るまで、ともにうめき、ともに産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています」(ローマ8・22)と記しています。本総会に招かれた専門家の助け

<sup>13</sup> インド政府計画委員会『第11次5カ年計画文書』第1巻、4ページ。

<sup>14</sup> [https://www.vatican.va/content/john-paul-ii/en/speeches/2001/april/documents/hf\\_jp-ii\\_spe\\_20010427\\_pc-social-sciences.html](https://www.vatican.va/content/john-paul-ii/en/speeches/2001/april/documents/hf_jp-ii_spe_20010427_pc-social-sciences.html)。

により、母なる地球はいま、刷新されたより良い世界の誕生を準備する陣痛に耐えているのではなく、「搾取の傷によってうめいている」のだと、**FABC50** 周年総会は認識するに至りました。

60. 教皇フランシスコの回勅『ラウダート・シ』によって、次のことをわたしたちは思い起こします。つまり、自然の苦しみ、気候変動の犠牲者の苦しみを自分自身の苦しみとすることができて初めて（19 項参照）、わたしたちは持続不可能な資本主義的生産モデルを放棄し、同時に、自らのライフスタイルを刷新するために必要な措置を、真剣に選び取るのです。

61. わたしたち自身が直面しなければならない苦しみを通して、気候変動のために、現在も将来も尊厳を奪われるアジアの多くの子どもや若者たちの表情の中に、ベツレヘムの幼子を見出すでしょう。マリアとヨセフの苦しみは、子どもたちにまともな家、十分な栄養、適切な医療と教育を与えることができない、多くの親たちの表情の中に見て取れます。気候変動がその環境に及ぼす影響のために移住を余儀なくされている親たち、戦争や武力紛争の暴力、水不足や有害廃棄物の処理をめぐる紛争の結果から逃れなければならない親たちの中にも、マリアとヨセフの苦しみが見て取れます。

62. わたしたちの大陸で隣り合う諸宗教とともに、善意のすべての社会集団、政治と経済領域で責任を担っている人々も交えて、地球と貧しい人の叫びに耳を傾けながら、統合されたわたしたちの司牧的な働きは、より良いアジアと人類の幸福という展望に向けて、共有された旅の中で、新たな道を切り開きうるのです（『ラウダート・シ』 49 項参照）。

63. 実際、アジアの教会が教皇フランシスコによる、エコロジカルな回心の呼びかけに応えるとき、わたしたちは、人間が環境を濫用することによって引き起こされる自然災害に対して、もともと被害を受ける貧しい人々に、現在の世代が与えている大きな不正義に目覚めさせられます。エコロジカルな回心によって、わたしたちが自然を破壊するとき、同時にわたしたち自身をも破壊しているのだということをまた思い起こします。わたしたちが、共通の家である地球上のすべての被造物と生命体と、いかに複雑につながり合っているかを理解して初めて、神から与えられた、被造界の管理者としての役割を果たし始めることができるのです。

## I. アジア大陸に調和と平和をもたらす諸宗教対話

64. アジアは多くの宗教と文化の存在する地です。ヒンドゥー教、仏教、ジャイナ教、シーク教、神道など、いくつかの世界宗教はアジアで生まれました。こうしたアジアの多宗教的な状況の中、それぞれの宗教は自らの居場所と自立性を求めつつ、競争心が生まれることがあります。キリストの霊と福音に従い、キリスト者は他の宗教と競争しようとするべきではありません。むしろ、キリスト教信仰を復興させ、キリストの生きたあかし人となるために、自らの生活の中で福音的価値を表現することに関心をもつべきです。

65. グローバル化、消費主義、物質主義、非人間化、自然からの搾取など、多くの変化と課題に直面する現代世界において、キリスト教が他の宗教や世界観と共存していかなければならないのであれば、教会と個々のキリスト者は、価値観、責任、美、喜び、幸福の観点から、自分たちが提供できる

ものがあることを世界に示さなければなりません。実際、価値相対主義によって麻痺した世界に対し、実行可能な倫理的・道徳的指針を提供することができる包括的な世界観は、時代が必要とするものです。したがって、これからの数十年は、キリスト教にとって絶好のチャンスであると同時に、大きな挑戦でもあるのです。

### 第3部 識別する

#### 霊がアジアの教会に語っていること

66. マタイは、空を「見上げ」、星を眺める時間を取る知恵とひらめきのある人たちを、「占星術の学者たち」として、道を求める人たちを描いています。これは、彼らが地上の関心事について、天の導きを探し求め、内省していることを意味しています。

67. 福音記者は、占星術の学者たちが星を見て、ともに旅をしながら、本当の目的地であるベツレヘムから少し離れたエルサレムへの道を見出したと語ります（マタイ 2・1 参照）。マタイは、「ユダヤ人の王としてお生まれになった方」を探す彼らの旅が、当時ユダヤの王であったヘロデの関心を引いたと伝えています。「これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々も皆、同様であった」（マタイ 2・3）。ヘロデ王は祭司長たちや律法学者たちに、自分の権力を脅かす「メシア」は「どこで生まれることになっているのか」（マタイ 2・4）と問いかけます。祭司長たちや律法学者たちは聖書を調べ、ミカ書 5 章 1 節を引用して、異邦人たちが探している「ユダヤ人の王としてお生まれになった方」の預言された出生地として、「ユダヤのベツレヘム」を指し示しました。彼らをここまで導いたのは星だったので、ヘロデは「占星術の学者たちをひそかに呼び寄せ、星が現れた時期を確かめた」（マタイ 2・7）のです。そして、「行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせしてくれ」（マタイ 2:8）と指示して彼らをベツレヘムへと送り出しました。幼子を見つけたのち、彼らはエルサレムに戻り、ヘロデにその子の居場所についてのさらなる情報を託すべきだったでしょうか。この問いには、真剣な識別が必要でした。

68. アジアの教会は、ヘロデのような政治家や、エルサレムの祭司長や律法学者のような地元の宗教指導者たちと、何度も同じように出会ってきています。アジアの初期の宣教師たちもまた、自らの存在に脅威を感じる、政治的・宗教的権威者にも遭遇しました。現代の宣教師たちも、同様の困難に直面しています。なかには、「パートナーシップ」や「協力」を申し出る人もいます。こうしたさまざまな状況にどう対処するかについては、つねに識別が必要となります。

69. 第二バチカン公会議は、次のように識別の重要性を示しました。「聖なるかたから油を注がれた信者の総体は、信仰において誤ることができない。この特性は、司教をはじめとしてすべての信徒を含む信者の総体が信仰と道徳のことがらについて全面的に賛同するとき、神の民全体の超自然的な信仰の感覚を通して現れる」（『教会憲章』12 項）。

70. 共同識別のプロセスについては、シノダリティに関するシノドスの『手引書』2.2 項からいくつかの洞察を得ることができます。このプロセスは、神がわたしたち皆に何を語りかけておられるのかを識別できるように、お互いに、自らの信仰伝統に、そして時のしるしに耳を傾けることが必要である、と『手引書』は説明しています。この種の識別は継続的なプロセスであり、一度限り実行するというものではありません。究極的にそれは、「キリストに立脚し、聖霊の導きに従い、より偉大な神の栄光のために生きる生き方」なのです。新約の教会はこのプロセスに従ったので、使徒たちは、識別

の全プロセスの最後に下された決定は、聖霊と彼らとの共同決定であると自信をもって述べる事ができたのです（使徒言行録 15・28 参照）。

71. 黙示録の中で、幻を見るヨハネはアジアの諸教会に向けて語り（黙示録 1・4）、「耳のある者は、『霊』が諸教会に告げることを聞くがよい」（黙示録 3・22）と述べています。このことばを念頭に置きながら、FABC 総会を通して、わたしたちは「霊は今の時代、アジアの諸教会に何を語っているか」とわたしたちは自問しました。とりわけ、ともに識別した九つの課題にどのように応えていくのか、問い直し、以下のことが求められていると感じました。

- A. 移住者、難民、先住民族に同伴する
- B. 家庭に特別な注意を払う
- C. アジアの教会において、女性に新たにリーダーシップの役割を与える
- D. ジェンダー問題に取り組む
- E. 若者に向けた奉仕職を実践する
- F. デジタル技術の有効活用を推奨する
- G. 都市化とグローバル化の中で、包摂的成長に基づく経済を促進する
- H. 共通の家をケアする
- I. アジアにおいて橋を架ける人、架け橋となり、対話と和解の道具となる

#### A. 移住者、難民、先住民族に同伴する

72. 地方と外国からの移住者の多くは、洗礼を受けたカトリック信者であり、「霊的なサバイバル・キット」の一部として信仰を携えています。とくに、受け入れ国で孤独を感じると、彼らは結束する傾向にあります。祈りの集いや聖書研究会に参加し、一緒にロザリオを唱え、自分たちがよく知っている信心業を一緒に行うなどして、自分たち自身の支援グループを創設します。母国では、おそらく積極的なカトリック信者ではなかった人たちも、異国の地にあって直面する課題や困難な状況に心理的、霊的に対処する最善の方法として、信仰に引き付けられるようになるのです。彼らは、なぐさめの源泉、逃れ場、連帯の場として、移住者のためのチャプレンの働き、奉仕職を見出します。

73. 移住者、難民、行き場を失った人々に門戸を開いてくれている地方教会に、わたしたちは深く感謝しています。また、彼らに典礼の場を提供し、搾取する人々から彼らの権利を守り、人身取引や性虐待の被害者に司牧的ケアを提供するよう尽力している小教区に、わたしたちは触発されます。当然のことながら、移住や人身取引に関連する問題は非常に大きなものであるため、政府や非政府機関だけでなく、市民社会との連携が多くの場合必要となります。さらに効果的なのは、移住してきたカトリック信者の霊的・司牧的ケアのニーズに応えるという共通の取り組みにおいて、地方教会同士が先を見越したパートナーシップを組むことでしょう。とりわけ、このようなニーズに対応するために「属人区 (Personal Prelature)」を創設するというフィリピン司教団の提案に注目しました。

74. 信仰の実践が根本的に減少している、「カトリック」が支配的な国々では、多くの場合、カトリックの移住者たちが、すでに冷え切ってしまった小教区に新たな火種を持ち込んでいます。たとえば、

アジアから他国に移住したカトリック信者が、単に熱心に信仰を実践したり、マリア信心、クリスマスのノベナの夜明けミサ<sup>15</sup>、四旬節や復活祭の実践、保護聖人の祝いといった伝統行事に参加したりするだけで、み摂理のように宣教者へと変身している様子を思い浮かべています。黒いナザレの人の行列や幼子イエスへの信心、シンガポールの「永遠の助けの聖母」へのノベナ、インドのベランカンニの聖母やサーダナの聖母大聖堂への巡礼、ベトナムのラ・ベンの聖母やパキスタンのマリアマバード、スリランカのマドゥーの聖母への巡礼など、アジアの民間信心は幅広く、奥深く広がっています。アジアからのカトリック移住者たちは、彼らの独特な信心を、隠された富のように届け、それは世界中の多くの国々へと広範に広がり続けています。

75. 教皇は昨年、ローマのカトリック移住者の共同体を励まし、説教で次のように語りました。「皆さんは福音の喜びを受けています……そしてこの喜びは、皆さんの中で……皆さんの目、表情、歌や祈りの中で顕著に表れています。皆さんが他国に信仰をもたらす喜びの中に表れているのです」<sup>16</sup>。「働きに行くところはどこであっても、彼らは信仰の種をまいています」と述べ、彼らの「目立たずに勤勉な存在」は、「謙遜で、隠れていて、勇気に満ち、忍耐強い存在を通した……信仰のあかし」だと見えています。

76. 福音の喜びを携え、信仰に生き、大いなる勇気をもってキリストをあかしする中で、宣教する弟子へと変容するアジア人カトリック移住者たちについても、教皇は同様の感慨を表明することができたでしょう。それゆえわたしたちは、アジアのカトリック移住者の養成とエンパワーメントに貢献するために、FABCの中でできることを実行しようと決意しました。

77. とりわけ、わたしたちのケアと支援を必要としているのは、「開発」の名のもとに社会から疎外され、移住を余儀なくされている先住民族です。ここ数十年、先住民族の苦境に対する感受性と意識が高まっていると見えています。2007年の国連総会では「先住民族の権利に関する国連宣言」が採択され、世界中で先住民族を自認する集団のうち、アジアが大半を占めていると認識されました。一般的に、先住民族はその地にもっとも早く定住した人々で、莫大な文化的遺産を有しているだけでなく、生態系や社会の災害を経験しているグローバル化された世界において、より良い人間生活を送るための知恵や慣習を世界中の人々に提供します。世界の多くの地域では、気候変動に適応するための先住民族の知恵や農業実践も、次第に認知されるようになってきています。その結果、彼らが直面する社会文化的、政治的、経済的、エコロジー的課題のために、より一層の同伴と支援が求められています。搾取されている状況において、教会は、その預言者的伝統に基づき、先住民族の代弁者となり、社会文化的対立の橋渡し役となるべきです。教会は、先住民族とともに歩み、より熱心に支援しようとするとき、彼らの基本的な権利と尊厳を支持し、主張する者でなければなりません。同様に教会は、文化に配慮した福音化のため、アジアのさまざまな先住民族の諸文化を、キリスト教信仰をますます創造性に富んだ方法で表現する好機ととらえるようになるはず<sup>17</sup>です。

## B. 家庭に特別な注意を払う

<sup>15</sup> フィリピンでは、クリスマスの準備の中で、「シンバン・ガビ」として有名。

<sup>16</sup> 教皇フランシスコ「フィリピンのキリスト教伝来 500 周年記念ミサでの説教」。

<sup>17</sup> FABC50 周年総会『案内文書』。

78. 実に家庭は社会の基本的な細胞であり、真の安定した文化のための重要な要素の一つです。さらに、聖ヨハネ・パウロ二世教皇は次のように述べています。「家庭は、アジア文化において非常に重要な位置を占めています。……（それゆえ）孝行心、高齢者と病人への愛と配慮、子どもたちへの愛、そして調和といった家庭の価値観は、すべてのアジア文化と宗教的伝統において非常に尊重されています」（『アジアにおける教会』46項）。

79. 実際、「家の教会」には、神の国をあかしし、告げ知らせる特別な召命があります。子どもにとって最初の、第一の教育者である親は、共同責任の精神のもと、信仰実践の模範となります。子どもたちの最初のカテキスタとして、彼らに福音を伝え、子どもたちから、彼らが生きているまさにその福音を受け取ります。そのような家庭は福音を広め、他の多くの家庭や地域の福音宣教師となるのです（教皇ヨハネ・パウロ二世使徒的勧告『家庭 愛といのちのきずな』123項参照）。

80. FABC50 周年総会は、家庭生活と奉仕職のある重要な側面に注意を喚起しました。

- i) 子どもと若者の信仰養成には、その子どもたちの人生においてもっとも重要な指導者である親を対象とする奉仕職が必要になります。さらに、子どもたちの信仰の旅において重要な瞬間は、諸秘跡を受けるときです。
- ii) 小教区内の家庭に関する諸運動体は、信仰の教師としての役割の中で、親たちを教育し、支えることができます。したがってまた、「小教区家庭グループ (Parish Family Cell)」は、教会基礎共同体 (BECs)、「女性グループ (Women's Cell)」、その他の小教区組織とネットワークを組み、危機に瀕している家庭に援助を提供できます。
- iii) デジタル世界は家庭をソフトターゲット（訳注：比較的脆弱と見られる攻撃対象）にしています。したがって、教会は、家庭の中の信仰を強化する上で、このことを考慮に入れておく必要があります。
- iv) 混宗婚の夫婦は、その子どもたちとともに教会生活の中に導かれ、一致していくよう、特別な司牧的配慮を必要とするでしょう。
- v) 責任ある親としてのあり方に関する教会の教えを特別に広める必要があります。
- vi) 人間関係についての、世代を超えた指導教育を奨励する必要があります。
- vii) 家庭は、人間関係を築き、深めるためのスキルを身につけるよう援助される必要があります。これは、結婚講座や結婚後の講座を通じて行えます。
- viii) 独身男女、性的少数者、高齢者、寝たきりの人、家族を亡くした人、病者や身体障がい者、危機的状況にある個人と家庭といった、社会的弱者に対する特別な支援やケアが必要でしょう。

81. それゆえわたしたちは、すべての人が互いを尊重し、調和を保ちながらともに暮らし、親たちは自分自身や子どもたちのために充実した時間をつくり、人間として、キリスト者としての成長と発達を支える家庭を発展させていくことを目指します。年長者が尊重され、いのちの文化が守られるアジア社会が実現していくよう努めます。移住者たちと一つになり、難民たちが再び家族とともに生活で

きる社会をアジアに築きたいと願っています。「愛の文明」<sup>18</sup>を成し遂げようとしているのです。そこでは、家族が他の家族を助け、年長者が若い夫婦を指導教育し、安心できる共同体が（現実と仮想の両方で）形成され始めます。子どもや若者が次第に成熟した市民として、やがては宣教する弟子として成長することができるのです。

### C. アジアの教会において、女性に新たにリーダーシップの役割を与える

82. 国際総長連盟（UISG）の会合で、ある省の長官である枢機卿が質問を受けました。「なぜ教会や社会でジェンダー平等を経験することが難しいのでしょうか」<sup>19</sup>。彼はこう答えました。「男女がともに歩むという問題は、もっと深く掘り下げられ、探求されなければならないものです。わたしたちは聖書の根本的な洞察に立ち返り、全面的に問い直す必要があります。つまり、神の似姿であるとはどういうことでしょうか。それは、男女がともにいることを意味しています。というのも、男女はそれぞれでは神の似姿を表さず、ともにいて初めて神の似姿となるからです。事実、神にとって、一致と多様性はまったく問題ではありません。わたしたちにとっては、これは歴史を通じて大きな問題となっていました。わたしたちのいのちのこの側面を回復する必要があります」。

83. そこで、わたしたちの努めは、人としての感覚を取り戻すことです。人間であることの本質は個別化を伴うものです。わたしは他者とは異なりますが、他者なしに十全に人間であることはできません。生まれるためには、関係性が必要であり、成長するためには、関係性が重要です。だとすれば、どうして霊的生活にも、このことが当てはまらないことがあるのでしょうか。だからこそ、わたしたちは関係性を再構築する必要があるのです。

84. FABC50 周年総会で、わたしたちは以下のことを確認しました。

i) ケアは、カトリック神学、教会史、福音を広めるといふ教会の宣教の重要な部分であり、ここでは、共通善の精神に基づき、わたしたちは他者、とくに女性のような弱い立場にある集団に配慮し、正義のもとにそれぞれに適切なものが与えられるよう尽力することが求められています。ケアと正義は、女性が教会の中で前進するために非常に重要であり、教会が育て続けるべき価値観です。

ii) 社会的友情と政治的慈愛の概念（回勅『兄弟の皆さん』88、169 項参照）に基づき、低所得の女性労働者、外国人の家庭内労働者、少数民族、虐待された女性、その他社会的弱者の女性に対して、教会諸団体からの司牧的ケアが提供されるべきです。

iii) マリアの賛歌（ルカ 1・46-55）に基づき、女性は、解放の対象であり主体として認められるべきです。歴史の主体であり、変化の担い手なのです。

iv) 教会は、女性との連帯を確認し、女性をエンパワーし、女性の自助グループを支援し、社会変革を提唱するために、これまでと違った方法を用いるべきです。実際、女性と男性の平等な尊

<sup>18</sup> 教皇パウロ六世「聖年の閉幕ミサ説教（1975年12月25日）」。AAS 68 (1976), 145。

<sup>19</sup> ジョシュア・J. マケルウィーによる、ジョアン・ブラス・ジ・アビス枢機卿へのインタビュー。National Catholic Reporter、2013年8月12日。<https://www.ncronline.org/news/vatican/vatican-religious-prefect-gender-inequality-exists-church>。2023年2月19日アクセス時点。

厳は、わたしたちが神の似姿に造られたという確証から生まれています。さらに、このことは、指導的役割を含む教会生活のあらゆる側面における女性と男性の分かち合われた、平等な参加へと転換されなければなりません<sup>20</sup>。

85. アジアの教会は女性の体験に耳を傾ける必要があります、女性は自分たちの話を聞いてもらって、教会生活に貢献できたと感じる必要があります。生きた実践（プラクシス）が神学化するための軸となる場合、女性の生きた体験が排除されることにはなりません。抑圧的な構造に抵抗する女性たちの闘いによって、アジアにおける既存の神学を再構築する新たな道が開かれるのです。

#### D. ジェンダー問題に取り組む

86. 教皇フランシスコは最近のインタビューで、神はすべての子らをありのままに愛しておられると明言し、同性愛を罪と定める法律は不公正であると批判する一方、**LGBTQI+**の人々を教会に迎え入れるようカトリック司教に呼びかけました<sup>21</sup>。

87. 教皇フランシスコの発言は、同性愛者の権利擁護者たちから画期的な出来事として歓迎され、**LGBTQ+**の人々に対する彼の全般的なアプローチや、カトリック教会は、差別なくすべての人を受け入れるべきだという彼の信念と一致しているものと受け止められました。彼は『カトリック教会のカテキズム』**2358** 項を引用しています。「かなり多くの男性や女性が、同性愛の根強い傾向を持っています。この傾向は、客観的には逸脱ですが、彼らの大部分には試練となっています。したがって、同性愛的な傾向を持つ人々を軽蔑することなく、同情と思いやりの心をもって迎え入れるべきです。不当に差別をしてはなりません。これらの人々は、自分の生活の中で神のみ旨を果たすように、キリスト信者であれば、自分のこの傾向から生じる困難をキリストの十字架の犠牲と結び合わせるように、と呼びかけられているのです」。

88. 「ヒューマン・ディグニティ・トラスト」（訳注：英国拠点の慈善団体、世界各地で同性愛を犯罪とすることに異議を唱える戦略的訴訟に注力）によると、世界の約 **67** の国や地域で、同意のある同性間の性行為を犯罪としており、そのうち **11** の国や地域で、死刑を科しうる、または科します。専門家によれば、法律が強制力をもたない場合でも、**LGBTQI+**の人々に対する嫌がらせ、汚名、暴力の原因となっています。

89. 異なる性的指向をもつ人々は、ときに主の食卓における差別を訴えることがあります。キリスト教信仰の源泉であり頂点であるエウカリスチアは（『カトリック教会のカテキズム』**1324** 項参照）、イエス・キリストのうちにある、神の無条件の愛の秘跡であり、すべての人、正しい人にも正しくない人にも、聖人にも罪びとにも授けられます。それは、キリストのからだと血によって実現される、新しい永遠の契約を通して、すべての人に与えられる神の恵みです。エウカリスチアは、わたしたちのような砕かれた人間のために砕かれたからだであり、それによってわたしたちは、キリストに、そし

<sup>20</sup> 『プレディカテ・エバンジェリウム』序、**10** 項参照。

<sup>21</sup> 以下サイト参照。 <https://www.npr.org/2023/01/25/1151328275/pope-francis-says-being-homosexual-isnt-a-crime>。

てそのからだである教会のメンバーへと変えられうるのです。実際、主のみが、打ち砕かれたわたしたちをいやし、完全性を取り戻してくれるのです。

## E. 若者に向けた奉仕職を実践する

90. 若者は成長の中でもっとも困難な時期を経験し、キリストとの旅の中で成長しようとするとき、導きと支えを必要とします。若者たちが主との関係性の中で成長するよう、教会で教えることは、彼らがなすすべてのことにおいてキリストに仕えるための準備となります。若者に向けて奉仕職を実践するとき、彼らが将来、指導者になるように準備するだけでなく、教会を築き上げるために貢献するようエンパワーしているのです。キリストのために若者たちを活性化することは、つねに教会の関心事となっています。若者が必要としているのは、彼らが参加することを歓迎し、失敗しても忍耐強く寛容であり、人生の選択において彼らを導き、彼らが成熟した、責任あるキリスト者の成人へと成長するのを助ける教会です。教皇フランシスコの印象的なことばを思い出します。「教会は、自らの仲間である司祭、修道者、信徒に、他者という聖なる土地で自分の履物を脱ぐこと（出エジプト 3・5 参照）を学ばせてくれる、『同伴する技術』を教えなければなりません」（『福音の喜び』 169 項）。したがって教会は、いつでも、どのような状況においても、若者に同伴しようとしています<sup>22</sup>。

91. 教会は、地域社会、小教区、地区、教区のあらゆるレベルにおいて、若者に向けた奉仕職のプログラム、活動、機能性を定期的に見直し、若者が必要としていることが満たされ、家庭、地域社会、教会に統合されていることを確認する必要があります。

92. FABC50 周年総会は、若者に向けた奉仕職のうち、いくつかの重要分野を特定しました。

i) 信仰養成：信仰を適切で意味あるものにすることが必要です。信仰の体験や理解が確かなものでなければ、若者は世間の物質主義的な価値観や、諸セクトや他のグループの教えに影響されやすくなる危険性が生じます。

ii) 進路指導：進路指導は、自分の召命や人生の目的を識別するという文脈に組み入れられていく必要があります。

iii) カウンセリング：若者は、その両親が育った世界とは明らかに異なる世界に生きています。彼らもその両親も、この二つの異なる世界のギャップを埋めるためにカウンセリングを必要としています。若者はまた、大人への道を歩む激動の海を泳ぎ切るために、専門家による導きを必要としています。

iv) 出かけていくことと参加：若者は、自分が生きていきたいと思う世界や社会を創り出す一員となる責任を引き受ける必要があります。また、自分たちが生きる地域や社会の諸課題に取り組むことから始め、市民としての課題、政治的課題にかかわっていく必要があります。

93. キリストのような指導者となるには、信者の中の若いメンバーに奉仕し、彼らとその潜在能力を最大限に発揮できるよう助けることが必要です。若者へ投資することは、キリストのからだを発展さ

---

<sup>22</sup> インド・カトリック司教協議会（CBCI）第 29 回総会（2010 年）参照。

せるために必要です。究極的には、若者の養成期に靈的に成長するのを助けることが、現在も、未来においても、キリストのために、彼らに影響力を与えることになるのです。

94. **FABC50** 周年総会は、若者のケアという文脈の中において、未成年者や社会的弱者を保護する必要性について考察しました。**FABC50** 周年総会の『案内文書』にはこう記されています。「教会はまた、未成年者に対する性虐待のスキャンダルに直面しています。権力の濫用（権威の悪用）は、教会が立ち向かわなければならない課題を突きつけています」。

95. 子どもを尊重し、年長者を敬うという価値観は、アジアの家庭にとってトレードマークのようなものです。わたしたちは、教会が、養成、体系的・構造的変革、社会的弱者擁護のための支援運動を通じて、長期的な変化をもたらす取り組みに関与すべきであると認識しています。こうした取り組みの多くは、すべての人の善のために、**NGO** や市民団体と協力し、ネットワークを構築することによって実施されなければなりません。教会が神の国を告げ知らせ、聖霊の力のうちに現状を変革し続けるとき、こうしたパートナーシップは、ただひたすらに、教会は自分自身のために存在するのではなく、アジアのすべての人々に奉仕するものであるという事実をいっそう際立たせます。（『教会憲章』5項参照）。

#### F. デジタル技術の有効活用を推奨する

96. 科学者たちは「第四次産業革命」<sup>23</sup>について語っています。現在、アジアには **22** 億人のオンライン・ユーザーがおり、その **95%** がモバイル機器を利用しています。仮想現実決して実際の対面の出会いに取って代わるものではありませんが、情報技術の急速な進歩とデジタル革命がわたしたちの生活に影響を与え、変化し続ける中、わたしたちはこの現実に対して将来を見据えた宣教的応答が必要になります。結果として、この「デジタル移住者」の世代がデジタル世界に参入し、教会の宣教のためにデジタル技術を効果的に活用することが切実に求められています。

97. パンデミックは、デジタル技術の力と有用性を高めました。制限や閉鎖があつたにもかかわらず、小教区は人々のところに出かけていくことができ、靈的支援や信仰養成をオンラインで提供できるようになりました。

98. しかし、こうした新しいデジタル・プラットフォーム、とくにソーシャル・メディアにおいては、技術を所有する人がルールを決めます。彼らはデータを所有し、それに支配力をもっていること両方から利益を得ます。広告によって操作し、彼らが流通させる物語をコントロールしてきました。カトリックのメディア関係者は、教会の指導者たちに、彼らもまたインフルエンサーであり、告げ知らせるべき説得力あるメッセージをもっていることを認識するよう求めています。

99. わたしたちは、効果的なデジタルによる福音化が必要であることを認めます。その中には、教会独自の安全なソーシャル・メディア・プラットフォームの立ち上げや、各地方教会にソーシャル・コ

---

<sup>23</sup> クラウス・シュワブ「第四次産業革命：その意味と対応方法」世界経済フォーラム、2017年6月29日アクセス時点。

コミュニケーション・チームを組織することが含まれます。さらに、デジタル世界では、物語が戦略であることを認識しつつ、神のことばをより効果的に、諸民族の人々の生活に結びつける物語、画像、隠喩の力を活用した、創造的なカテゴリーを推奨します。この奉仕職を主導することが期待されるのは、必然的に、いわゆる「デジタル・ネイティブ」と呼ばれる若者たちとなります。

## G. 都市化とグローバル化の中で、包摂的成長に基づく経済を促進する

100. グローバル化が今日の世界経済を支配しています。FABC50 周年総会『案内文書』にはこう書かれています。「グローバル化が、新自由主義的経済システムや利己主義的な政治権力闘争によって推進される場合、それは経済的・政治的権力が、少数の人の手や多国籍企業に集中することにもつながりえます。こうしたことが結果的に、弱小国や小企業、先住諸民族、貧しい人、社会的弱者、環境を犠牲にし、世界的な諸問題を解決する多国間協調主義が無視される原因となります。しばしば、各国政府と癒着する多国籍企業は、利潤の最大化と権力行使を目的として、世界の自由市場を指導すべき規則や規制が、相対的に存在していないことを利用しているのです……。利益への貪欲さと際限ない成長によって、アジアにおける不平等はまた増大し、非対称的な発展プロセスがもたらされます」。

101. 現在の経済秩序は貧困層を優遇せず、むしろ何百万人もの人々を死に追いやっています。わたしたちを奮い立たせる教皇フランシスコのことばを心に留めます。「『殺してはならない』というおきてが人間の生命の価値を保証するための明確な制限を設けるように、今日においては『排他性と格差のある経済を拒否せよ』ともいわなければなりません。この経済は人を殺します。……現代ではすべてのことが、強者が弱者を食い尽くすような競争社会と適者生存の原理のもとにあります。この結果として、人口の大部分が、仕事もなく、先の見通しも立たず、出口も見えない状態で、排除され、隅に追いやられるのです」（『福音の喜び』53 項）。

102. 2022 年 5 月 25 日、教皇フランシスコは「世界連帯基金（Global Solidarity Fund）」の理事たちに対して発せられたメッセージの中で、次のように述べています。「経済は回心しなければならず、（しかも）今、回心しなければなりません。わたしたちは自由主義経済から、人々が分かち合う経済、共同体主義経済へと移行する必要があります。……自由主義者や啓蒙主義から派生する経済パターンでは生きていけません。共産主義から派生する経済パターンでも生きられません……」。

103. 都市化とグローバル化は不可逆的な傾向であるように見えるため、教会指導者たちは、アジアにおけるこの新たな傾向について十分な情報を得、こうした状況に直面するよう司牧的に準備することが不可欠です。都市は社会的、政治的、経済的影響力をもつ場であるので、アジアで増加する都市部のキリスト者は、都市部住民全体に効果的に奉仕職を實踐する、塩と光のあかしする共同体となれるよう、深い信仰と社会的・文化的スキルを育て、身につける必要があります。興味深いことに、新約聖書の頂点が都市であることは象徴的で、その都市とは、神が約束した貧しい人のための正義、へりくだった人のための救い、被造界の刷新を成し遂げる、争いのない家の一部をなす「新しいエルサレム」なのです（黙示録 21-22 章参照）。

## H. 共通の家をケアする

104. 受肉した神、イエス・キリストの弟子としてわたしたちは、被造界と徹底的に対話を繰り返す必要があります。わたしたちは被造界の執事であり、主人ではありません。次の世代に対して、わたしたち共通の家の完全性を保ち、将来の世代の未来と尊厳を保証する義務を負っています。世代間の連帯は選択肢の一つなのではなく、むしろ正義の問題、尊厳をもって生き残るための課題です。環境は各世代に貸与されているものであり、次の世代にどのように残すかという責任を負っています。

105. わたしたちは自然から学び、また、自然を自分たちの外側にあるものとしてではなく、むしろ自分たちをはぐくむ母のように考える先住民族の知恵から学ぶ必要があります。わたしたちが皆、いかに持続可能な方法で被造界を取り扱えるかを、彼らから学ぶべきです。というのも彼らは、自然が一体的に相互連携したシステムであり、わたしたちはその一部に過ぎないと認識しているからです。残念なことに、今日、アジア諸国は最多の排出量増加を記録しています。したがって、一方でアジア各国政府は、また他方、先進工業国は、長年温室効果ガスの主な排出者であると同時に、持続不可能な生産モデルで利益を得てきており、**2015**年のパリ協定に関する決定事項を早急に履行する必要があります。

106. **2015**年のパリ協定は、気候変動への地球規模の対応においてまさに画期的なものでした。気候変動とその悪影響に取り組むため、パリで開催された国連気候変動枠組条約締約国会議（**COP21**）で世界の指導者たちは、**2015**年**12**月**12**日、この歴史的なパリ協定の中で一つの躍進を遂げました。この協定は、すべての国の指針となる、以下の長期目標を定めています。i) これは気候変動のリスクと影響を大幅に軽減するものであることを認識しながら、世界の平均気温の上昇を産業革命以前の水準から**2**度未満に抑え、気温上昇を産業革命前の水準から**1.5**度に抑える努力を追求すること、ii) 食料生産を脅かさない形で、気候変動の悪影響に適応し、気候変動に対する回復力と温室効果ガス排出量の少ない開発を促進する能力を高めること、iii) 金融の流れを、温室効果ガスの排出削減と気候変動に耐性のある開発に向けた道筋と整合性のあるものとする。この協定は法的拘束力のある国際条約であり、**2016**年**11**月**4**日に発効しました。今日現在、**194**の締約国（**193**カ国プラス欧州連合）がパリ協定に参加しています<sup>24</sup>。

107. わたしたちはまた、不作為の代償は、行動した代償よりもはるかに大きいこと、そしてパリ後の過去**7**年間と同様の状況が続けば**2.5**度にも届かず、とくにアジアや世界中の貧困に苦しむ人々にとって悲惨な結果をもたらすことを学びました。石油やガスの価格が高騰しているため、化石燃料の販売によって法外な利益がもたらされています。過去の轍を踏まず、こうして稼いだ資金が、再生可能エネルギーの創出、エネルギー効率の確保、より費用対効果の高い、時代を変革する技術開発に活用されることが、今現在、極めて重要です。

108. 気候変動に関する教会の「マグナカルタ」である、回勅『ラウダート・シ』を通して、エコロジカルな回心と気候変動対策を求める教皇の呼びかけに応え、**FABC**第**50**周年総会は、以下のことを強く訴えました。つまり、わたしたちがエコロジーに無責任で持続不可能な習慣や浪費的な生活様式に

---

<sup>24</sup> 以下サイト参照。 <https://www.un.org/en/climatechange/paris-agreement>。2023年2月15日アクセス時点。

終止符を打つこと、そして、エコロジカルに健全な固形・液体・気体の廃棄物管理を、先を見越して推進することによって環境意識を高め、有害な化学肥料、殺虫剤、除草剤に依存する農業モデルを拒否すること、さらに、石炭やその他の化石燃料から生成されるエネルギーに依存する産業を避けること、です。また、わたしたちの各部分教会内の諸組織から始め、意識して、アジア全域でクリーンで持続可能なエネルギーの生産を推進することを誓いました。加えて、アジア全域の先住民族、市民社会のあらゆるグループや各国政府代表者らと協力して、森林、河川流域、サンゴ礁を回復させ、野生生物を保護し、固有の生物多様性を保存し、生態系と生物群系を修復するよう働きます。

109. 一部の司教協議会や個々の教区が、石炭や化石燃料による電力といった「汚れたエネルギー」への投資から手を引く動きは、アジアの教会と社会が見習うべき具体的な動きの一つです。わたしたちは、自分たちの地域で意識を高め、先進国の教会が率先して行動するよう努力していきます。小教区や修道会にもそのようにすることを促すとともに、「ラウダート・シ・ムーブメント」やすべての教会組織は、それぞれの地域の状況に応じた行動計画を立案し、各国司教協議会や **FABC** 自体のレベルでも計画する必要があります。また、『ラウダート・シ』に照らして、他大陸の司教協議会連盟とともに、支援運動と、意識向上や行動に裏打ちされた努力を倍加させ、人々の苦悩を軽減することを決議しました。さらに、気候変動への懸念と行動に関連する、エキュメニカルと諸宗教間の率先行動や、市民グループとのパートナーシップにオープンな姿勢をとっていきます。また、教会の『ラウダート・シ』の目標、2015年のパリ協定の目標、国連の「持続可能な開発目標」を実現するために、政府や非政府機関とも協力するよう努めます。

## I. アジアにおいて橋を架ける人、架け橋となり、対話と和解の道具となる

110. 「橋を架ける人、架け橋」となる、というのは、アジア教会の使命と、アジア諸民族とその他の世界にもたらす福音をもっともよく表すイメージです。わたしたちがキリスト、受肉した神と告げ知らせるイエスの使命と目的を、これは要約しています。イエスはアジアで生まれ、アジア人として育ち、この大陸に偉大な霊的伝統を誕生させたのです。ヤコブが天と地を結ぶ階段の夢を見たという聖書の物語（創世記 28・10-19 参照）は、救いの物語を総括しています。それは、罪の結果、つまり神を演じ、いのちの源そのものである創造主との結びつきを傲慢にも断ち切ってしまう人間の傾向を打ち砕くため、率先して行動するイスラエルの神の物語です。神から、互いから、被造界から、そして自分自身からわたしたちを引き離すのは罪なのです。

111. わたしたちはそれ以来、父祖ヤコブのように絶えず「神と格闘」し、神のいつくしみに助けられて罪を克服しようとしてきました。しかし、罪深いわたしたちではあるものの、神が再び人類とともに歩むことができるように、「神のみ使いたちが上ったり下ったりできる」階段として、「明日に架ける橋」の役割を果たすよう、召されています。やがて、ヤコブの夢は、彼自身、まさにその橋として仕えるために来られた神の子、イエスによって成就することになります（ヨハネ 1・51 参照）。聖パウロが言うように、「神は、み心のままに、満ちあふれるものを余すところなくおん子の内に宿らせ、その十字架の血によって平和を打ち立て、地にあるものであれ、天にあるものであれ、万物をただおん子によって、ご自分と和解させられました」（コロサイ 1・19-20）。

112. わたしたちは、キリストご自身を、架け橋であり、わたしたちがその中に「道であり、真理であり、いのち」(ヨハネ 14・6)を見出した方であると告げ知らせています。キリストのみ名によるのみ、アジアの教会は霊の呼びかけに応え、橋を架ける人となれるのです。FABCが初めて招集されたときから、わたしたちは一貫して、アジアの教会の基本的な司牧的優先事項の一つとして、対話を提案してきました。対話は、橋を架ける人となるというわたしたちの召命の最善の表現です。わたしたちは対話の理解を、諸宗教、諸文化、貧しい人という三重の文脈を超えて、若者や女性との対話、政府や市民団体との対話、被造界との対話、技術者、企業家、科学者との対話、飢えている人、ホームレスの人、読み書きのできない人、移住者や難民、先住民族、人身取引の被害者、障がい者、非正規滞在者、政府に反対する人、さらに依存症やその他の精神疾患に苦しむ人との対話にまで拡大するよう招かれています。

113. わたしたちが、平和構築における、また和解を促進するための奉仕職におけるアジアの教会の役割を強調したのは、対話の文脈においてです。平和を促進するためには、暴力の加害者との対話と同様、暴力の被害者との対話が不可欠であることを理解するようになりました。そうでなければ、虐待を受けた人が虐待する人となり、被害者自らが被害を与える人になる、悪意ある暴力の連鎖を食い止めることができません。

114. アジアの多くの地域で、教会は多くの紛争状態の中を歩み、結果として和解の担い手となるよう求められています。わたしたちには、罪の告白、痛悔、償い、罪のゆるしという、教会のゆるしの秘跡の四つの基本要素が有する知恵から学ぶことが多くあります。これらの要素は、わたしたちが個人として神と和解する必要性に取り組む上で効果的であるのと同様、個人の、家族の、共同体の、社会における争い事に取り組む上でも効果的です。もしわたしたちが自分の欠点や失敗を認める謙遜ささえもっていなければ、いったいどのようにすれば和解できるのでしょうか。もし、自分たちが引き起こしたかもしれない危害や傷に対して自責の念を表さなければ、どうでしょう。もし、償いをして具体的な補償行為を行う決意をしなければ、どうでしょう。もし、ゆるすことは弱さではなく強さなんだと人々に受け止めてもらわなければ、どのようにして和解のために働くことができるのでしょうか。

115. わたしたちが明らかにした九つの課題に適切かつ効果的に対応するためには、養成が極めて重要な要素となります。実際、わたしたちが直面している課題と、なされるべき適切な対応のためには、司教、司祭、修道者、信徒など、すべての人が協調して対応し、わたしたちが協力し合う教会を確実に築く努力をすることが必要です。したがって、すべての人、とりわけ信徒の養成プログラムが優先事項となります。実際、洗礼を受けたすべての人々の献身的な、よく調整された関与がなければ、わたしたちが直面する課題に適切に対応することはできません。したがって、司教、司祭、修道者は、信徒が教会と社会の両方において洗礼の責任を生きられるようにエンパワーする訓練を受ける必要があります。こうすることで、わたしたちは「刷新された教会」を手に入れることができるのです。そして、そうすることで、すべての諸民族にとって、よりよいアジアとなるのです。これこそが、よりよい世界のために働く中で、アジアの教会が感じている召命なのです。

116. 霊はアジアの教会に、信者の共通祭司職の上に、役務的祭司職の基礎を回復するよう招いています。このことは、かつて「皆さんのためにわたしは司教であり、皆さんとともにわたしはキリスト者

です」と語った聖アウグスチヌスによる以上に、うまく表現されることはないでしょう。もしわたしたちが彼らと同じキリスト者の仲間、キリストのからだの仲間として尊厳において同等でなければ、信者の共同体のための叙階された奉仕者として、自分の役割を有意義に果たすことはできません。第二バチカン公会議はこの事実を非常に明確に述べています。「彼らは、地上のいのちとは別のいのちの証人であり、管理者でなければ、キリストの役務者であることはできない。しかしまた、人々の生活とその状況に関わりのないよそ者であっては、人々に奉仕することはできない（一コリント 10・33 参照）。司祭の役務そのものが、特別の理由で、この世に自分を合わせてしまわないよう求めている（ヨハネ 3・8 参照）。しかし同時に、司祭はこの世で人々の間で生活し……なければならない」。『司祭の役務と生活に関する教令』3 項）。

117. **FABC50** 周年総会において、わたしたちは、過去の **FABC** 総会で何度もなされた決議を繰り返し、より参加型の教会を促進し、信徒にリーダーシップの役割を委譲できるように、聖職者のための初期養成、生涯養成プログラムに必要な改革を開始することとしました。これを可能とするためには、神学生、司祭、修道者、司教の生涯養成に目を向けなければなりません。アジア各国の固有の文化や世界観に即した養成のプログラムや制度を考案しなければなりません。叙階された人々は、最後の晩餐で弟子たちに「わたしはあなたがたの中で、いわば給仕する者である」（ルカ 22・27）と念を押し、イエスの模範にしたがって、キリストのからだの中でわたしたち全員が担うように招かれている、さまざまな奉仕職や役割を通して、信徒や奉献生活者とリーダーシップの役割を分かち合うことを学ばなければなりません。

118. 女性を含む信徒が、人間的、霊的、司牧的、知的養成に参加し、よい手本となる人々から親しく個人的な指導を受け、司祭候補者が指導を受けながら、貧しい人の生活状況の中に入り込み、教会基礎共同体や人間基礎共同体を体験し、諸宗教間、エキュメニカル、文化対話に参加することにより、「羊の匂いのする羊飼い」を育てるために必要な養成状況を作り出すこととなります。とくに、**FABC** の教えと伝統を、養成を受ける人たちの教育課程に含める必要性について指摘してきました。

## 第4部 たまものを提供する

### アジアの文化と霊性

119. 「家に入ってみると、幼子は母マリアとともにおられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた」(マタイ 2・11)。

120. マタイが描いた、星に導かれてベツレヘムの質素な家へやってきた占星術の学者たちの姿には、典型的なアジア人の姿が描かれています。来訪者たちは、自分の家に入るときに教えられてきたように、ちょっと立ち寄り、丁寧に履物を脱ぐのです。これは、「家庭」とは神聖な空間をともに創造するものである、ということの思い起こさせる、アジア流の仕方です。そこでわたしたちは、足に付いた埃を払い、洗うことで、家の中の奥まった場所で「聖なる方」と出会う準備をするのです。神が住まいとし、わたしたちの間に現存するのは、まさに家庭という限られた空間の中です。家と家族のあらゆるケアと愛情が必要な、か弱い幼子のうちに、わたしたちはとりわけ、その現存を認めるのです<sup>25</sup>。

121. 真の神の姿へと人間の尊厳を高めるために、自分を無にしてわたしたち人間と同じ者となり、幼子となった神を礼拝する中で、わたしたちは意味を見つけるのです。教皇フランシスコはこう述べています。「無限のものへの憧れに満たされ、天を見渡し、星の輝きに感嘆し、文明の進歩と人間の心のたゆまぬ探求を鼓舞する超越者の探求を経験するのです」<sup>26</sup>。イエスは、人となった神であり、したがって、人間は神のようになれるのです。イエスは、わたしたちが自らのいのちをたまものと理解し、世の救いに向けられたすべてのたまものの源である神にそれをささげられるよう、自らを聖なるたまもの (*sacerdos*) としてささげたのです。

122. 教会の中であれ、そのアジアの教会が生きる世界の中であれ、わたしたちは多様な世界観、宗教、文化、色と味わいを扱っており、それらは緊張と同時に、調和の中で共存しています。

123. 占星術の学者たちのように、わたしたちアジア人は厳かな沈黙を重んじ、寺院やヒンズー教僧院、聖地で観想のために孤独を求めます。手を組み、頭を下げる仕草は、祈りや礼拝のときだけでなく、相手を認め、敬意を表し、安らぎを与えるとき、また、相手を祝福し、榮譽を受け入れ、感謝を表し、対話や友情を始め、ゆるしを請い、別れを告げるときにも用います。ことばで祝福を求める代わりに、年長者の手を取って額に押し当てる人たちもいます。

---

<sup>25</sup> 聖ルカの幼少期物語は、しばしば聖マタイの物語から採られた要素と組み合わせられて、ベツレヘムの伝統的な情景を描いてきた。普通の家の中ではなく、馬小屋の飼い葉桶の中にいる。そこは世界の中心で、天と地、神と人間が出会う場であり、そこで天の存在と人間が出会い、そこに羊と羊飼いが住み、そこで羊飼いと占星術の学者たちはひれ伏し、神である幼子を拝むのである。

<sup>26</sup> 教皇フランシスコ「主の公現ミサ説教」、2023年1月6日、聖ペトロ大聖堂。

124. イエスの王職が飼葉桶の絶対的な貧しさの中に表されていることは意義深いことです。貧困の中に生きる人の救いの力を認め、彼らを教会の中心に据えることで、貧しい人々はわたしたちに、しばしば彼らの生活そのものによって表される神の不思議な知恵について熟考するよう呼びかけます<sup>27</sup>。

125. 教皇フランシスコが『兄弟の皆さん』で述べているように、「今日では、皆が救われるか、だれも救われないか、そのいずれかなのだという意識を強める必要があります。地球上のどこかでの貧困、悪化、苦しみは、最終的には地球全体に影響する諸問題の静かな温床なのです」<sup>28</sup>。「どんな人からも、何かしら教わることはあるのですから、役に立たない人、いなくてもよい人はだれ一人いません。周縁部の人も例外ではありません。周縁に追いやられた人は異なる視点をもって、重大決定がなされる権力の中枢からは気づきえない現実の部分を見ている」<sup>29</sup>のだと、わたしたちは信じています。

126. 現代のわたしたちは、古代の占星術師のように、たとえば星の位置から「時のしるし」を読み取ることはできないかもしれませんが、自然の中、出会う人の表情、わたしたちの地域社会や世界で起こる出来事の中から「しるし」を読み取り続けています。アジアの諸文化のおかげで、わたしたちは神の存在、わたしたちと率先して意思疎通する神の存在に敏感であり続けており、つねに信仰と愛で応答するよう求められ、満ち足りた人生へと導かれるのです。

127. 『主イエス』が述べているように、「この信仰の要素（イエスの受肉）を考慮して、今日の神学は、ほかの宗教的体験が多様であることと、神の救いの計画においてそれにどのような意義があるかということについて思念しながら、ほかの諸宗教の多くの人物や積極的要素も神の救いの計画の中に組み込まれているのかどうかを、また組み込まれているのなら、いかに組み込まれているのかを探究するよう促されています」<sup>30</sup>。

128. したがって、わたしたちアジア人にとって「見る」とは、目で物事の位置を確認する以上のものです。それは、自分の無知を謙虚に認め、さらに知りたいと深く願い、世界に対して畏怖と驚きを抱く気質から生まれる、気遣いの心性です。わたしたちアジア人は、人生を白か黒か、光か闇かといった二者択一の選択とは見ません。むしろ、願わくはわたしたちの内面、わたしたちの間、わたしたちの周りで実を結ぶ、創造的なダイナミズムの中の緊張に、自覚的に取り組み続けたいものです。

129. アジアの教会は、先人たちが示す非暴力への強い文化的傾向から学ぶべきことが多くあります。わたしたちは自衛術をアートのレベルへと発展させ、そこでの目的は、決して加害者に危害を加えたり、傷つけたり、殺したりすることなく、その動きに先んじ、打撃を避け、相手が自らの重みによって倒れそうになるまでその攻撃を阻止することです。自衛術のアートはアジアではさまざまな名前と呼ばれていますが、原理は同じです。一貫して非暴力的な方法で不正義に対抗するために立ち上がった

---

<sup>27</sup> G. グレゴリー・ゲイ（聖ビンセンシオの宣教会）「聖ビンセンシオ会の新福音化年を告げる聖ビンセンシオ会家族メンバーへの総長書簡」、2014年7月18日。

<sup>28</sup> 教皇フランシスコ回勅『兄弟の皆さん』137項。

<sup>29</sup> 同、215項。

<sup>30</sup> 教皇庁教理省宣言『主イエス』14項。

た民衆によって集団的に行われる場合、新たな名称が与えられます。たとえば、外国支配の終焉につながった、マハトマ・ガンジーの輝かしい遺産の一つである、インド人による「サティヤーグラハ」や、独裁政権に終止符を打った、フィリピン人による「ピープル・パワー」などです。

130. 社会の数多くの紛争の中を進んでいくことを学ぶときでさえ、すべての人の中に苦しむ仲間の姿を見るという選びをすることで、平和と和解へと向かうアジアの道へとわたしたちは開かれます。暴力の悪循環の芽を摘むために、不正義と暴力の被害者が必要とするいやしの精神をつねに念頭に置きながら、非暴力の手段で正義のために闘います。わたしたちは、弱さとしてではなく、強さとしてゆるす選択肢を信じています。このように、神の無条件の愛の秘跡としてのキリストの十字架の力は、アジア人の魂に深く響くのです。パウロがまさに述べているように、究極的な分析において、究極の徳は信仰でも希望でもなく、アガペー、無条件の愛なのです（一コリント 13・13 参照）。実にこれこそが、アジアの教会が告げ知らせるよい知らせです。ひどく濁った水の中で静かに咲く蓮なのです。

131. したがって、対話は **FABC** の司牧上の優先事項の最上位に、当初から一貫して位置づけられてきました。そのさまざまな形の中でも、わたしたちはとくに、わたしたちが「三重の対話」——隣接する宗教伝統との対話、隣接する文化との対話、貧しい人との対話——と呼んでいるものに焦点を当ててきました<sup>31</sup>。教皇フランシスコは、シノダリティの観点から、対話の範囲を対人的なコミュニケーションにとどまらず、シノドス的概念である「同伴」と「共生」へと拡大するようわたしたちに着想を与えました。たとえその姿が罪によって傷つけられ不明瞭になっていたとしても、すべての人間は神の似姿に造られ（創世記 1・26-27）、本性的に善であるというキリスト教の基本原理に対話は基づいているため、決して悪意の推定から対話が生まれることはないのです。

132. アジアの各地方教会の中で、「アジアの顔」をもってイエスを紹介する必要について語る人々がいる場合、それは彼らがアジアの中で、ヨーロッパ人宣教師の宣教努力によって、ヨーロッパの衣をまとったキリスト教信仰を受けとった地域にいるからです。このことは、キリスト教の普及が植民地時代の過去と結びついている国々では、なおさら理解できます。皮肉なことですが、キリスト教が最初にアジアの大地に根を下ろしたこと、神の子が最初に肉体を得たのはアジアの文化や環境であったことを、アジアの中で忘れがちな人がいます。のちの、聖書におけるギリシャ・ローマ的な信仰表現のまさに中心には、きわめてセム的、アジア的文化が存在しているのです。

133. また、忘れられがちなのは、初代教会の最初の宣教地は、ルカの使徒言行録で言及されているような、かつて「小アジア」と呼ばれていた地域に属していた都市、つまり、シリア、アンティオキア、フリギア、ガラテヤ、エフェソ、イコニオン、デルベ、リストラとピシディア、トロアスとミレトスなどへのパウロの宣教旅行であったという事実です（使徒言行録 16 章）。黙示録も、「アジア州にある七つの教会」への幻によるメッセージから始まっています（黙示録 1・4）。

---

<sup>31</sup> 韓国の司教たちの証言のおかげで、わたしたちは彼らが対話の中で行っているように、キリスト教以外の信仰や文化を「他の」諸宗教・文化として語るのではなく、隣人である宗教・文化として語り始めるよう決意した。

134. さらに、キリスト教信仰は実際、もともとアジアに合った形で、第1千年期に多くのアジア諸国に到達していたことも、現在では歴史的に十分証明されています。しかし、迫害を含む多くの状況によって、第1千年期にキリスト教信仰がアジアに根付くことは妨げられてきました。インドのような一部の国は例外で、使徒聖トマスによってインドに到達した最初期の宣教活動からそのルーツをたどる、東方典礼のシロ・マラバル、シロ・マランカラ教会などは明らかです。

135. アジアの他のほとんどの地域では、スペイン、ポルトガル、フランス、イギリスの旧植民地におけるヨーロッパからの宣教師や、アカプルコを経由してフィリピンに到達した南北アメリカからの宣教師によってキリスト教の福音化活動が進められたところではどこでも、宗教美術、建築、典礼表現の中に、キリスト教の西洋的表現が残っています。こうした状況で、キリスト教にアジア的表現を加えようとする努力が存在するのは当然です。ローマとの交わりは、アジアにおける教会の「ローマ化」を意味する必要はありません。

136. 『典礼憲章』で明確に述べているように、第二バチカン公会議は、地域文化や言語への典礼のインカルチュレーションへ支持を表明しているにもかかわらず、アジアのさまざまな国における、キリスト教信仰の表現と実践の両方に形を与え続けるべき異文化間の対話に関しては、まだ実行されるべきことが多くあります。

137. 司牧活動、典礼表現、民間信心、先住民族の霊性といった領域において、より文脈に適合した神学や、文化への感受性の高い実践を求める、アジア、アフリカ、ラテンアメリカに共通する希求は、わたしたちアジア司教協議会連盟から出されたすべての文書に表れています。これらの希求は、現在進行中の「シノダリティに関するシノドス」が考慮するよう勧めている、「信者総体の信仰の感覚 (*sensus fidelium*)」によって正当であると立証されるのです。

## 第5部 新たな道を開く

### 別の道を通して帰って行った

138. 「ところが、『ヘロデのところへ帰るな』と夢でお告げがあったので、別の道を通して自分たちの国へ帰っていった」(マタイ 2・12)。

139. マタイは、占星術の学者たちが情報を求めてエルサレムに来たとき、こう尋ねたと記しています。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです」(マタイ 2・2)。彼らは神の導き、つまり、星に従うと同時に、人間の導きにも従ったのです。つまり、自分たちが探していた方を見つけるために他の人々の助けを借りたのです。その方を見つけた彼らは、「幼い王」の前にひれ伏し、宝をささげました。そして、別の道を通して自分たちの国に帰っていったのです(マタイ 2・9 参照)。

140. わたしたちアジアの司教団は、FABC50 周年総会に集まったとき、同じようなことをしました。第2部で説明したように、わたしたちは祈りと観想の中で神の導きを求め、さまざまな分野の「専門家」に人間による導きを求めました。そして、アジア各国への「バーチャル訪問」を通じて、さまざまな現実を見つめたのです。わたしたちはアジアの現実を見つめ、霊がわたしたちに何を語りかけているのかを識別しました。発見した宝物をイエスにささげ、そして今、FABC50 周年総会によって切り開かれた新たな道筋をたどって、「別の道」で教区に戻る準備が整いました。FABC50 周年総会のあと、わたしたちが旅したいと願う五つの道をたどってみましょう。

#### A. 異文化による表現から、インカルチュレーションされた福音の告知へ

141. 神の子キリストは、アジア人としての人間性を備えていました。最初の宣教は「小アジア」の国々で行われましたが、その後、第2千年期中ごろに多くのアジア諸国がキリスト教化されたのは、スペイン帝国とポルトガル帝国が世界を二分していたヨーロッパの地政学と結びついたものでした。そのため多くのアジア諸国では、キリスト教はヨーロッパの衣をまとってやってきました。多くの場合、自らの修道会から派遣された宣教師たちは、外国列強の王室の庇護を受けていたのです。

142. もちろん、別の道を選んだ宣教師もいました。彼らは、自らの宣教が植民地支配当局によって取り込まれるのを防ぐために、別の道を歩んだのです。16世紀から17世紀にかけてのそのような宣教師の一番顕著な例としては、日本と中国(それぞれ)にキリスト教を伝えたイエズス会のイタリア人宣教師、アレッサンドロ・ヴァリニャーノとマッテオ・リッチ<sup>32</sup>、そして南インドを舞台にリッチの足

<sup>32</sup> これらのイタリア人イエズス会士は、主にインドのポルトガル領ゴアを出発点として中国のマカオに向かったため、インドの東方典礼キリスト者との接触は、彼らに福音化への異なるアプローチについてのアイデアを与えた可能性がある。たとえば、シロ・マラバル典礼のインドのキリスト者は、他に類を見ない、ヒンドゥー教の伝統的習慣にインカルチュレーションされた、聖トマスを汲むキリスト者としてしばしば注目されており、学者たちから「文化はヒンドゥー教的、宗教はキリスト教的、礼拝は東洋的」と表現されている。フェリックス・ウィルフレッド『オックスフォード・ハンドブック アジアのキリスト教』(オックスフォード大学出版局) 参照。

跡をたどったロベルト・デ・ノビリが挙げられます<sup>33</sup>。彼らは時代を先取りし、アジアの文化や宗教との対話という FABC の主張よりもほぼ 4 世紀先を行っていたと言えるかもしれません。

143. イタリア人イエズス会士、アレッサンドロ・ヴァリニャーノとマッテオ・リッチは、信仰を伝えるために現地の言語習得だけにこだわらなかった点でユニークでした。彼らは、現地の文化や信仰をもまた、真剣に受け止めたのです。ただ教えるために来たのではなく、受け入れ国の世界観に身を浸して学ぶために来て、アジア文化の土壌に福音を根付かせました。彼らは「日本と中国のいにしへの文明に浸透するには、征服型の福音化モデルではまったく実りなしになるだろう」<sup>34</sup>と悟りました。同じことが、インドで、受け入れ国の文化に福音を根付かせようとしたロバート・デ・ノビリとその協力者たちにも言えるでしょう。彼らは「キリスト教とヨーロッパ社会との間に本質的な同一性があるという仮定、すなわち『キリスト教世界 (Christendom)』という概念を否定した」<sup>35</sup>のです。

144. 現地の習慣に適応し、福音化される国の文化を尊重するという、こうした宣教アプローチは、実際、当初はローマの支持を得ていました<sup>36</sup>。しかし不幸なことに、17 世紀に他の修道会が中国での宣教活動を始めると、彼らはヴァリニャーノとリッチが採用したインカルチュレーションと適応の福音化モデルに強く反発し、激しい論争に火がつき、やがてローマの注目を集め、いわゆる「中国典礼論争」に発展しました。その結果、教皇クレメンス十一世は 1704 年、教令『クム・デウス・オブティムス』を發布し、これらの中国の祖先祭祀を非難し、中国人キリスト教徒の実践を禁止しました。この教令のもっとも深刻な結果の一つは、以前は同情的だった皇帝が、キリスト教禁止令を出すという極端な行動に出たことです<sup>37</sup>。中国の典礼をめぐる論争は 20 世紀前半まで続き、1939 年、ピオ十二世は布教聖省を通じて、ついに新たな教令『プラネ・コンペルトウム』を発表しました<sup>38</sup>。近年の教皇たちが一貫して、ヴァリニャーノやリッチの、インカルチュレーションした対話的な宣教アプローチをよ

---

<sup>33</sup> もう一人は、聖人となった殉教者、ポルトガルのイエズス会士、聖ジョン・デ・ブリットである。彼はデ・ノビリの指導を受け、17 世紀後半に活躍したようである。

<sup>34</sup> R. Ellsberg, *All Saints*, Claretian Publications 2008, p. 37-38.

<sup>35</sup> 同。

<sup>36</sup> たとえば、1659 年にパリ外国宣教会が与えられた教令の中で、布教聖省は次のように記している。「宗教（つまり、カトリックのキリスト教）と道徳に明らかに反している場合を除き、これらの諸民族にその儀式、習慣、慣習法を変えるように説得するために、熱心に行動したり、議論を吹きかけたりしてはならない。フランス、スペイン、イタリア、その他のヨーロッパ諸国を中国人の中にもち込むこと以上の不合理があるだろうか。彼らのところにわたしたちの国をもち込むのではなく、信仰を伝えるのであり、その信仰とは、どの民族の儀式や人々の慣習法も、それが好ましくないものでない限り、拒否したり傷つけたりすることなく、むしろそれらを維持し保護するものである。Marcel Launay; Gérard Moussay, *Les Missions étrangères : Trois siècles et demi d'histoire et d'aventure en Asie*, Librairie Académique Perrin, 2008, 77-83.

<sup>37</sup> Dun Jen Li, *China in transition, 1517-1911*, Van Nostrand Reinhold, 1969, 22.

<sup>38</sup> この教令は、たとえば祖先祭祀についての、ヴァリニャーノとリッチの宣教アプローチを実質的に正当化した。George Minamiki, *The Chinese rites controversy: From its beginning to modern times*, Loyola University, 1985, 197、参照。

り肯定的に評価していることは、非常に心強いことです<sup>39</sup>。教皇フランシスコは、リッチを「外国人であることを超えて世界市民となった、出会いの人」<sup>40</sup>と評しています。

145. **FABC50** 周年総会でわたしたちは、教会がインカルチュレーションされた福音化に立ち戻らなければならないと感じました。インカルチュレーションは、受肉と受難の神秘の神学から生まれるものです。キリストにおいて、神はわたしたち人間を抱き、人間のからだを身にまとい、自らの「受肉」を通して人類を救います。聖パウロはフィリピの信徒への手紙 2 章 7-8 節で、これを神の「ケノーシス (kenosis)」と呼んでいます。「かえって『自分を無にして』、しもべの身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした」。根底にある真理は、「ことばは肉となった」ということです。「彼はわたしたちの間に天幕を張りました」。

146. 受肉の神秘は教会とともに続いています。聖霊は、「キリストのからだ」である教会を形づくる弟子たちの共同体において、世界中の弟子たちの地方教会や共同体において、肉となり続けています。「信仰」は決して真空の中では生まれません。福音化はつねに、「異文化相互作用性 (interculturality)」という文脈の中で行われるものです。

147. 「インカルチュレーション」とは実際、信仰と文化の対話に必要な側面であることは十分理解しているものの、結局のところ、対話は、新しい形のインカルチュレーションをもたらすことができる「異文化との出会い (intercultural encounter)」に自らを開いている人々の間でのみ可能です。異文化との出会いによって、対話のパートナー双方にとって有益な、ある種のダイナミズムが生み出されます。そしてこのことは、「文化超越化 (transculturation)」と呼ぶべきもの、すなわち、諸文化を超越し、諸文化の成長と浄化さえ可能にする、共通の価値観の発見へとわたしたちを導くのです。

## B. 教会基礎共同体 (BEC) から人間基礎共同体 (BHC) へ

148. バンコクで開催された **FABC50** 周年総会において、交わり、参加、宣教の三つの側面において絶え間なく成長する、よりシノドス的な教会を目指すという願いに照らし、わたしたちは「教会基礎共同体」を社会における刷新の触媒となるようあらためて方向付けるよう決議しました。実際、シノダリティは対話を超えたものであり、単にコミュニケーションを促進するだけではありません。コミュニケーション以上に本質的なものは、同伴であり、ともに旅することであり、友好的な関係です。わたしたち共同体が、自分たち自身や、自分たちの「教会的な」関心事に固執するだけでは、生活様式としてのシノダリティを真に受肉させることはできません。もし共同体がその使命に忠実になろう

---

<sup>39</sup> 教皇ヨハネ・パウロ二世、教皇ベネディクト十六世、教皇フランシスコは、リッチに対し惜しみない賛辞を送った。<https://christiansforsocialaction.org/resource/heroes-of-the-faith-matteo-ricci>、[https://www.vatican.va/content/benedict-xvi/en/messages/pont-messages/2009/documents/hf\\_ben-xvi\\_mes\\_20090506\\_ricci.html](https://www.vatican.va/content/benedict-xvi/en/messages/pont-messages/2009/documents/hf_ben-xvi_mes_20090506_ricci.html)。

<sup>40</sup> <https://www.americamagazine.org/faith/2022/12/17/matteo-ricci-sainthood-cause-244370>。

と、つまり、パン生地の塊の中のパン種のようになろうとするならば、わたしたちは「人間基礎共同体」になっていくような種類のキリスト者の共同体を築かなければなりません。

149. わたしたちはまた、もはやその目的を果たせなくなった奉仕職を手放し、代わりに、聖霊から惜しみなく授けられたカリスマを識別し、新しい奉仕職を創造する覚悟をもっと固めていなければなりません。そうした奉仕職は、信者が教会に奉仕するようになるような種類のものだけでなく、より重要なことですが、信者が社会全体に奉仕するメンバーとして力を与えるようなものです。わたしたちの信徒は、とくにあらゆるレベルの紛争に対処するよう支援するため、また、共通善による政治に積極的に取り組み、とりわけ正義と人間の尊厳の相互尊重に基づく平和と和解のための活動にそうするために、自らの信仰の最善の資源を活用すべきです。

### C. 対話からシノダリティへ

150. 過去 50 年間、FABC は一貫して、「文化」と、「宗教」と、「貧しい人」と、この三重の「対話」の道を追求めてきました。この「対話」の道は今、「シノダリティ」において、より十全な表現を見出しています。シノダリティは、第二バチカン公会議が提唱した「公会議性 (conciliarity)」の精神に新たな表現を与えます。わたしたちが「シノダリティ」を心地よく感じるのは、わたしたちが FABC で粘り強く追求してきたことが、それによってより明確に表現されるようになったからです。たとえシノダリティが対話以上のものであったとしても、シノダリティは対話なしには成り立ちません。対話に伴う、耳を傾け識別することは、基本的にシノダリティに付随する同じ要素です。その目的は、対話する相手の「他者性」を超越することにほかならず、それによって、その人は、「隣人」、交わりの仲間となるのです。対話の目的は、「交わり」「参加」「宣教」への希求を包含する、「シノダリティ」によって、より雄弁に明言されるのです。

151. FABC50 周年総会を通してわたしたちは、占星術の学者たちのように、新しい道を見出そうと努めました。パウロの異邦人宣教に反発した一部の使徒たちが、宣教をユダヤ人改宗者に限定しようとしたときに、ペトロがまさに最初のエルサレムの使徒会議（使徒言行録 15 章）で行ったことをするよう導かれました。エルサレムの使徒会議において、ペトロがリーダーシップを発揮して、ヤコブとパウロの間に立ち、2 人がともに行動するよう働きかけたのです（同、参照）。

152. アジアの新たな現実をともに識別する際、わたしたちの道を照らしてくれたのは、教皇フランシスコが、とりわけ、『福音の喜び』『ラウダート・シ』『愛のよろこび』『兄弟の皆さん』、そして最近発表された『プレディカテ・エバンジェリウム』などの教皇文書に含まれるその考察を通して、教会にともした新たな炎でした。FABC50 周年総会は、わたしたちにこれらの教えを真剣に見直す時間を与えてくれました。そしてわたしたちは、ペトロの座のこれらの記念碑的な教えが第二バチカン公会議を再確認し、普遍教会に「自らの源流への回帰」(ressourcement) を挑み、同時に、「時のしるし」(aggiornamento) に応えているのだと理解しました。

153. 第二バチカン公会議のもっとも具体的な成果の一つが「世界代表司教会議 (シノドス)」であったことから、教皇フランシスコは、教会が「シノダリティ」を真剣に受け止め、それが、「内向き (ad

*intra*」にも「外向き (*ad extra*)」にも、両方向に拡大するよう呼びかけてきたと感じています。「内向き」には、教会の中で、友なる洗礼を受けたカトリック信者、つまり、奉献生活者、聖職者、信徒、とりわけ女性や若者たちの中で、です。教会とともに「外向き」には、外に向かって、友なるキリスト者、友なる信仰者、友なる人間、とりわけ貧しい人、そして共通の家に生きるすべての友なる被造物に向かって、です。

#### D. 告知から物語へ

154. イエスが1世紀のパレスチナで、福音として告知知らせたのは、神の支配の到来でした。イエスは人々を招き、わたしたちのうちに神の支配が実現するという共通の願いの中に、人間の尊厳と高潔さを見出すようにしました。そうすることで、当時、利用可能だったあらゆるメディアを用いて、自らのメッセージに注意を喚起したのです。当時のラビたちの多くが、会堂の演壇という馴染みのあるメディアに固執していたのに対し、イエスは人々がいる場所、つまり湖畔の船の上、食卓の仲間、道ばた、丘の中腹、木の下など、どこでも、そのメッセージを告知知らせたのです。そしてたいいの場合、素朴な、何気ない会話を通してでした。

155. イエスの仕方は、現代においてももっとも効果的なもの、つまり物語で語るのです。世界中の人は良い物語を愛しています。誰かが物語を語り、「むかしむかし……」、「遙か遠くの海辺の村で……」、「ある日、二人の息子がいるお父さんがいました……」などといつものように話を始めると、わたしたちのうちにはいつも、耳を傾けたくなる「子ども」がいます。2006年にチェンマイで開催された「アジア宣教会議」で、アジアにおけるイエスのみ顔を振り返ったときのテーマが、「イエスの物語を語る」だったことを思い出します。わたしたちはまた、アジアの教会にとってもっとも特徴的な生き方であり、交わりを強め、共同体を築き上げる、実生活に即した会話を深める、「物語を語る」ことを促進することによって、わたしたちの教会基礎共同体を育てるための方法論を決定しました。

#### E. 踏み固められた小道から新たな司牧優先事項へ

156. FABC50周年総会において、わたしたち司教は、古い、踏み固められた道から、新たな優先事項へと移行するための具体的な決定を行ってきました。そのいくつかを詳述しましょう。

157. わたしたちは、交わりと参加のダイナミズムの中で共同体をはぐくむことによって、アジアのすべての地方教会における、宣教に向けたわたしたちの奉仕職を刷新することに取り組みます。そうすることで、信仰者が、自己中心の姿勢 (*self-referentiality*) から、「地の塩」「世の光」となる召命を真に生き抜くものへと方向転換することをわたしたちは希望しており、その動機は、神の計画に従って刷新され、再創造されることを切望している世界に向かって、キリストの福音の喜びを分かち合うことだけです。わたしたちの奉仕職が、奉仕する教会の使命の一環として、単に教会に奉仕することから、世界に奉仕することへと方向転換できるよう願っています。

158. わたしたちの小教区が、「人間基礎共同体」を築く「教会基礎共同体」を育成することによって、現状維持から、宣教へと変革するよう専心します。すべての地方教会が、子どもや社会的弱者の

成人にとって安全な空間であり、あらゆる種類の虐待に積極的に対処し、防止するよう確約します。教会が貧しい人、とくに移住者、移動する労働者、避難民を歓迎し、つねに包摂的で、ジェンダーに敏感で、参加型の雰囲気維持するように努めます。

159. わたしたちは、「地球の叫びと貧しい人の叫びの両方」に真に敏感な仕方、現在の気候の非常事態に直面して、司牧的・エコロジー的回心への呼びかけを、絶えず聞いています。汚染源となるエネルギーの使用を拒絶し、クリーンで再生可能なエネルギーの生成を促進することによって、二酸化炭素排出量を削減することに取り組んでいる諸団体と提携するため、あらゆる努力を惜しみません。エキュメニズムと諸宗教対話の精神に基づき、友なるキリスト者、友なる信仰者、そして友なる人類全員と団結し、わたしたちの共通の家である地球を守ります。環境を破壊する産業への投資から断固として手を引くよう、意識をもって、わたしたちの全組織に要求します。

160. わたしたちは架け橋として、また橋を架ける人として仕え、紛争のさなかにあっても和解のために積極的に働きます。意識をもってすべての人の幸福を促進し、社会でもっとも恵まれない階層、とりわけ子どもと高齢者、障がい者、依存症患者、精神衛生上の問題に苦しむ人、自由を奪われた人、人身取引や超法規的殺人の被害者、先住諸民族、戦争や自然災害の被災者の福祉に、とくに配慮した社会の建設に、一貫して参画します。真の対話の中で、他者の声に耳を傾けることにより、補完性と調和の精神を生き抜くよう決意します。

161. キリスト教諸伝統と近隣の諸宗教の兄弟姉妹と協力し、平和と調和の文化、包摂的な成長と発展の経済状況、教育と人格形成に向けた全人的アプローチ、人間の総合的発展に向けた科学技術の進展を促進するよう支援します。とりわけ、青少年の福祉に配慮した、適切で賢明なデジタル技術の活用に専心します。人権、貧困緩和、人身取引、環境のケア、ソーシャルメディアの正しい活用などの課題について、政府の諸機関、NGO、市民団体と連携します。

162. わたしたちは、一対一の対話（dialogue）を超えて、多対多の会話（multilogues）へと発展し、批判的思考や共同識別の原理を促進します。市民の道徳的人格の養成を通して国家建設に貢献する、あらゆる信仰共同体の自由を支持します。公的議論から、信仰、宗教、霊性を排除する、世俗主義のイデオロギーに抵抗します。より良い、より人間的な世界をはぐくみ、正義、平和、愛の文明を築くために、すべての善意の人とともに働きます。わたしたちの使命は、より良いアジアのために貢献し、より良い世界のために働くことです。

## むすび

163. アジアの人々に対して……すべてのものになるように

164. 聖パウロはコリントの信徒への手紙の中で、イエス・キリストの弟子であり宣教者であることについて述べています。「弱い人に対しては、弱い人となりました。弱い人を得るためです。すべての人に対してすべてのものになりました……福音のためなら、わたしはどんなことでもします。それは、わたしが福音とともにあずかる者となるためです」(一コリント 9・22-23)。このことばに照らして、2022年10月12日から30日まで、バンコクのバン・フー・ワーンで開催された、FABC50周年総会のこの「最終文書」を謹んで発表します。アジアの諸民族と全人類に対する、愛と平和と正義に満ちた、神の「よい知らせ」である「福音のために」、わたしたちはこの文書を作成しました。

165. アジアの教会は、イエスのうちに、わたしたちの一人であるおん子となられた神の前で占星術の学者たちが行ったように、この愛をあかしし、自らのたまものを差し出すことを学んで初めて、自由を受け、エンパワーし、新たないのちを吹き込むイエス・キリストの「福音」をもたらすことができます。キリストは、その教えの中で、またその生涯と死と復活を通して、すべての人と自然の創造主である神の愛といつくしみをわたしたちに表しました。神の愛に応え、「隣人」である、飢え渴く人、病者、外国人、移住者、先住民族、虐げられる人、困窮している人などに仕え、愛し(マルコ 12・29、マタイ 25・31-参照)、より良いアジアのために、さまざまな宗教、文化、社会の隣人たちと異文化間の関係性を保ちながら、シノドス的でインカルチュレーションされた教会においてともに旅するよう、キリストは教えています。

166. わたしたちはアジアの教会と諸民族を、祝福されたわたしたちの母、マリアの執り成しと保護にゆだねます。

イエスの母なるマリア

わたしたちがおん子に抱かれるよう、近くに引き寄せてください。

おん子がすべてのものを、たまものとしてわたしたちに差し出したように、

わたしたちももっているものをすべて、おん子にささげます。

どうか、イエスの福音の種がアジアの大地に根を広げ続けますように。

アジアの諸文化にイエスが受肉し続けますように。

イエスが行ったように、わたしたちも自分を無にすることを学べますように。

それによって世界はわたしたちのうちに、イエスのアジア的顔を見ることができるよう。

それによってわたしたちのうちに、わたしたちの間に、わたしたちを通して、

イエスの光はアジアの他の地域にも届くでしょう。

アーメン。

167. FABC50 周年総会のために作曲された、「アジアの歌」と題された歌の美しい歌詞でこの文書を締めくくることがふさわしいでしょう。マタイによる、占星術の学者たちによるベツレヘムへの旅の物語に着想を得たこの曲は、若々しく、希望と高揚感に満ちたアジアの音楽に乗せて、詩の形で書かれた祈りです。

## アジアの歌

ともに歩む神に祝福を

わたしたちの岸辺に愛が訪れ、すべての土地に種をまくのが見える  
夜が突然輝き出し、わたしたちを自由にする偉大なしるしがやってくる  
そして夜明けにあなたの太陽を見、わたしたちのすべての影が意味をもつようになる  
わたしたちは今、姉妹、兄弟を見、わたしたちの土地にはもうよそ者はいない

父なる神、いつくしみはあなたの名、主イエス、わたしたちの苦しみをあがなってください  
聖霊、あなたの大きい愛の炎でわたしたちを満たしてください  
ともに歩む神に祝福を  
ともに歩む神に祝福を

そして、貧しい人は、あなたへの賛美を告げ知らせ、若者たちは、あなたの使命を受け入れる  
そして、創造のうめきが今、聞こえる  
すべての人に聖なる平和を  
すべての人に聖なる平和を

あなたはわたしたちをともに織りあげ、さまざまな色がいま一つに輝く  
わたしたちは互いへの贈り物、すべての人にとっての塩であり光  
そして、夕暮れ時、新たな方角を指し示す、あなたの星を見る  
わたしたちは今、すべての姉妹、兄弟に仕え、わたしたちの地で一つの家族となる

父なる神、いつくしみはあなたの名、主イエス、わたしたちの苦しみをあがなってください  
聖霊、あなたの大きい愛の炎でわたしたちを満たしてください  
ともに歩む神に祝福を  
ともに歩む神に祝福を

そして、貧しい人は、あなたへの賛美を告げ知らせ、若者たちは、あなたの使命を受け入れる  
そして、創造のうめきが今、聞こえる  
すべての人に聖なる平和を  
すべての人に聖なる平和を

わたしたちが向かう周縁の地へ  
そして、主のみ顔を仰ぎ見て

そして、貧しい人は、あなたへの賛美を告げ知らせ、若者たちは、あなたの使命を受け入れる  
そして、創造のうめきが今、聞こえる  
すべての人に聖なる平和を  
すべての人に聖なる平和を

父なる神、いつくしみはあなたの名、主イエス、わたしたちの苦しみをあがなってください  
聖霊、あなたの大きい愛の炎でわたしたちを満たしてください  
ともに歩む神に祝福を  
ともに歩む神に祝福を

+++++

## アジアの諸民族としてともに旅する

「別の道を通して……行った」

マタイ 2・12

